
FF11 ~ 新たなる旅立ち そして ~

kuratos

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FF11 ～新たなる旅立ち そして～

【Nコード】

N5872I

【作者名】

kuratos

【あらすじ】

バストワーク共和国出身の新米冒険者ヴァンとユウジの冒険を描いた物語。

何も知らないまま冒険者になったヴァン達。

そんな二人の窮地を救ったのは 二人の女の子だった。

様々な出会いを繰り返していき、知らず知らずのうちに大きな事件へと巻き込まれていく。

プロローグ（前書き）

初めまして。

FF11を題材に勝手に小説を書いています。

えっと、基本的に、FF11に登場する街・場所を再現しているつもりです。が、所々書き換えている部分もありますので、ご了承くださいね。

登場人物が結構多かったり、世界観が分かりにくいかもしれないですが……。楽しんでいただければ幸いです。

それでは、どうぞ。

プロローグ

切り立った崖がけと赤茶色の土がむき出しの山しか無い荒野に一筋の風が吹く。

所々、ほんの少し緑色の短い草が生えているのが見えるが、それ以外は全て岩肌の茶色しか見えない。

山と言ってしまふには低い高台が点在している。その頂上部分には、まだ緑は多く茂っていた。

そんな高台から東のほうへ進んでみれば、バストア海を臨のぞむことが出来る。

そして、南の方には船乗り達の目印となる、モルヒエン灯台が建っていた。

その先は断崖絶壁だんがいぜつぺきになっていて、足を踏み外してしまえば……まず助からないだろう。

そんなバストア海は豊かな海産物かいさんぶつが取れることで有名だった。

荒野、と呼ぶのが相応ふさわしい、南グスタベルグへの入り口に新米冒険者しやせんのヴァンデスデルカは、ショートカットの金髪を風に靡なびかせ、目を新たな旅立ちの期待へと輝かせながら立っていた。

まだ真新しい防具を身につけ、緊張きんちやうと興奮こっぴんを抑えきることが出来な
いかのように、うずうずしていた。

『冒険者ぼうけんしや』 それは、簡単に言ってしまうえば、何でも屋であり、
便利屋。

街に住んでいる人、知人・友人、そして、国の重鎮じゆうしんと呼ばれるほどの人物からさえ依頼を受けることもある。

時には死と隣り合わせの任務をこなして報酬ほうしゆうを貰もらう。そんな自ら危

険へと進んでいく者もいる。

また、一方で合成と呼ばれる手法で色々な素材から生活に必要な物を作り出し、商売をしたりする者もいる。

はたまた、遺跡や拠点にいる、獣人を倒してその戦利品を売り生計を立てる者もいる。

一つの事に拘らず、様々な形で生きている者、それが冒険者だった。そして、この世界、ヴァナ・ディールにおいて、冒険者の時代とされていた。

モグハウスと呼ばれる、冒険者専用のプライベートルームが貸し出される。

様々な側面で冒険者という立場が優遇されていた。

何故、こんなにも冒険者が優遇されるのか……。その理由は二十年前に遡る。

二十年前の、獣人連合軍と人間の間で繰り広げられた戦い、『水晶大戦』で、冒険者の活躍無くしては、人間側の勝利は無かつただろう、とまで言われていた……。

だからこそ、ヴァナ・ディールでは冒険者があこがれる的になっていることも珍しくない。

だが、一部の人間、各国の重役などは冒険者の存在を疎ましく思っているのも事実だった……。

プロローグ（後書き）

どうでしたでしょうか？

読みにくい・こんな風にしたらいい。などなどありましたら、言っ
ていただけると嬉しいです。

旅立ち

新米冒険者のヴァンも子供の頃から、幼馴染のユウジと共に、冒険者に憧れている一人だった。

逸る気持ちを抑えて、ヴァンは冒険の第一歩を踏み出す……ハズだったのだが。

「ヴァンっ！」

「っ!?!? っど……」

踏み出そうとした足を戻して、ヴァンが声のした方を振り返ると、そこには幼馴染のユウジの姿があった。

ユウジもヴァンと同じ、ヒューム族。金色の髪を肩辺りまで伸ばしている。切れ長の目をしていて、周りから見ると少し怖い印象を与えていた。

だが、長く付き合っているヴァンは彼の人柄の良さを理解していた。

「どうした、ユウジ」

ユウジが怒っている理由が分からないままヴァンは聞いた。

「どうした、じゃない! どうして、俺を置いて行くんだよ?」

ユウジはかなり怒った口調でヴァンを問い詰めた。

「……。あ、ああ……。悪いな。早く行きたくてウズウズしてたんだ」

ヴァンは悪びれた風も無く、そう言った。

「お前、今俺のこと忘れてただろ! ……ったく……。楽しみにしてるのは分かってるけど、まさか置いていかれるとは思ってなかったよ……」

ユウジもヴァンとは長い付き合いだ。どんな奴かは良く知っていた。

「悪かったって！ よし、じゃあ、行こうぜ。俺達の冒険の始まりだ！」

「始まってすぐに終わらなければいいけど……」

ヴァンは初めての冒険に心躍らせながら、ユウジはそんなヴァンを見ながら溜息混じりに。グスタベルグへの道を歩き始めたのだ。

ヴァンとユウジ、新米冒険者の旅が始まった。

新米冒険者として門出は二人にとって花々しいものではなかった。

「くそっ……だめだ。体に力が入らないぜ。まさか……初戦で、
獣人とやりあう……ことになるとは……はぁ……、思ってなかった
な……」

息も絶え絶えになりながらヴァンが呟く。

「まったくだよ……。いつも、言ってる……じゃない、か。周
りには、さ。もっと気を遣えって……」

ユウジのほうも、息をすることさえ辛そうだった。

一体何が起こったのか。それは……。

旅立ち（後書き）

少しずつですが、投稿していきたいと思います。

頻度はまだ未定ですが、早め早めを目標に……。

油断……

南グスタベルグへ出てから半刻^{はんこく}。

照りつける太陽がちょうど真上に昇って、歩く者の体力を悉く奪^{ことごとく}つっていた。

そんな、状況の中でも初めての冒険に心躍らせていた二人は、周^{まわ}りへの注意を怠^{おこた}っていた。

元気良く歩く二人の背後に黒い影が近づいていた。気配に振り返ると、クウダフが剣を片手に、こちらを睨^{にら}んでいた。クウダフ族とは、鋭いクチバシを持ち、手足には魚のような鱗。そして、背中には亀の甲羅を背負っている見るからに亀。といった、獣人達のことだ。

バストウーク共和国の発展の影に、クウダフ族との激しい対立があった。そして、その対立は今もなお続いている。その因縁のため、彼らは一度^{ひとたび}、人間を見つけると、嬉々(きき)として襲^襲ってくる習性をもっていた。

突然のことで驚いた二人だが、一応、冒険者^{ぼうけんしゃ}としての自覚があるのか、武器を構えていた。

「こいつがバストウーク周辺を根城にしている、クウダフか。話には聞いてたけど、ホント亀みたいな奴だな」

「確かにね。はあ……。でも大丈夫かな……。初^{はつ}っ端^{ぽな}からクウダフなんて……」

ユウジは自信なさそうに呟いた。

「大丈夫だつて。初戦で負けるほど、俺は弱くは、ないっ！」

「ちよっ。いきなり行くのかっ。待てっ！」

そう言うとユウジの制止も聞かずに、ヴァンは構えていた片手剣を盾に当てて音を鳴らす。急に鳴り響いた音が不快だったのか、ク

ウダフはヴァンのほうへ向かっていく。

ヴァンは一般に『戦士』と呼ばれる職業だった。最前線で敵の攻撃を引き受けつつ、持っている武器で相手を倒す。最も中核となる存在だった。

巷ちまたの戦士達は片手剣のほかにも、斧や槍などのさまざまな武器を扱うことが出来る。が、今のヴァンには片手剣が精一杯だった。

一方、ユウジはというと、まだあまりバストウークなどの三国の間では広まっていない、『忍者』だった。右手と左手の片方ずつに刀とうと呼ばれる短刀を持つことが出来た。

忍者は東方とうほうの職業だった。だからこそ、この中の国ではあまり見られないのだった。

だが、ユウジの両親が東方の出身だったから、幼いころから忍者という存在を近くに感じる事が出来ていた。

一人飛び出していったヴァンに追いついたユウジは、ヴァンがクウダフの注意を引き付けている間に、音も無くクウダフの後ろに回りこむ。

事前に打ち合わせをしなくても息のあった行動が出来る。幼馴染だからこそその連携だった。

ヴァンが右手に持っているブロンズソードでクウダフの鎧へ切りつける……が、金属がぶつかる、ガンツ！ という鈍にぶい音がただけで、体を傷つけることは出来なかった……。

「っ！ 思ったより、コイツの鎧よろい固いな……。いけそうか、ユウジ」

片手剣を持っていた方の手が痺れているのを感じながら、ユウジへそう促す。

「さあね。でも、こんなところで、こんな奴相手に終われないでし

よっ！」

そうユウジが言うとクウダフの背後から急に現れ、構えた忍刀で鎧の隙間を切りつけた。

グエ……。

と、クウダフから呻き声のようなものが聞こえた気がした。

獣人の言葉は人間には理解出来ないので、どのくらい効いているかはわからない……。

だが、多少怯んだ様子を見るとなかなか具合だった。

「この調子だといけそうだな。このまま押し込むぞっ！」

そう、ヴァンが気合いを入れた時、クウダフがニヤッと笑った気がした。

「なっ。コイツ、今笑った……のか」

ヴァンは背筋が凍りついたのをはつきりと感じた。

人と同じ様な顔立ちでは無いので、笑うと異様な雰囲気だった。

笑った様な顔のまま、クウダフの動きが止まる。

急に動かなくなったクウダフに驚いたヴァンとユウジもまた、動きを止めてしまった。

次の瞬間、クウダフが何か、言葉を呟きだしていた……。

そして、それと同時にクウダフの周りに小さな光が集まっていた……。

突然のことに驚いた二人は動くことができなくなっていた。

そして……それが命運を分けることになった。

……絶望……

クウダフの紡ぎだす、言葉が終わったと同時にヴァンが地面に崩れ落ちた……。

いきなり起こった現象にユウジは勿論、ヴァン本人でさえも何が起こったのかわからないでいた。

「ヴァン、どうしたのっ!？」

地面に両膝がついているヴァンを見て焦ったユウジが声をかける。

「わから、な……い……。体に……。力が……」

ヴァンは体から力が抜けていくのを感じていた。

（なんなんだ……これは。あの一瞬で何が起こったっていうんだ!）

クウダフと出会った時に、ヴァンとユウジの二人は片手剣を持っていたので、『戦士』だと思い込んでいた。

だが、実際は違っていた。が、そんなことを二人は知る由も無かった。

ヴァンが、クウダフの方を見上げると、笑っていた顔を更に緩めてこちらへ向かってこようとしていた。

（おいおい……気味悪いな、ちよつと……というか、かなり怖いしっ!）

「倒れている奴ばかりに気を取られてると、痛い目あつよっ!？」

ユウジの忍刀がクウダフの首筋を切りつける。

結構効いたのか、後ろを振り返ってユウジの姿を目視する。

そして、ヴァンのことなど、忘れたかのようにユウジへ突進していった。

「ばか……野郎っ! お前が一人で相手してコイツに勝てるハズが……!」

倒れているヴァンが、ユウジに向かってそう怒鳴る。

「だろうね。でも、幼馴染が殺されるところをすんなりと見てる訳にもいかないでしょ！」

ユウジの方も無茶だと分かっていつつ、向かっていく。

戦士とは違い、忍者は敵と真正面で戦うことを得意としない。

あくまで、敵の背後から忍び寄り、葬る。暗殺が彼らの仕事なのだから、当然一対一の勝負でユウジが勝てるはずもない。

そのことを知ってか知らずか、クウダフはヴァンと対峙していた時よりも、明らかに余裕がある雰囲気だった。

ユウジへ持っていた片手剣を振りかざした！

「ユウジっ！ 盾も持って無いお前に攻撃を受け止める術は……！」

ヴァンがそう言うと同時に、キーン！と剣同士がぶつかり合う音が響いていた。

「まだまだっ！ これくらいで殺られる俺じゃないよ。ヴァンもそれくらい、知ってるでしょ？」

ユウジの声にヴァンが目を向けると、他の剣よりも遙かに短い刀身のハズの忍刀で、クウダフの刃を受け止めたのだった。

「お前……。それは、いくらなんでも、無茶、なんじゃないのか……？」

「あはは。そうだろうね。でも、なんとかしてみせるよっ！」
口だけは元気にユウジが返していた。

原因は分からないが、動けなくなったヴァンの少し向こうで、ユウジとクウダフが殺りあっていた。

クウダフはまるで遊んでいるかのように、ユウジへ斬撃を加えていく。

一度でも気を抜いてしまうと、殺られる攻撃をなんとか忍刀で凌

くユウジ。

一定のリズムを刻みながら、キーン！という音がグスタベルグに響いていた。

緩急を織り交ぜた斬撃を加えていく。

クウダフは、ユウジがギリギリで凌げるくらいの斬撃を放ち、少しずつ、じわじわと、ユウジの体力を奪っていった。

もし、この場にヴァン以外の人間が居て、この戦いを見ていたら、こう思っただろう。

『ああ……。もう、こいつらに勝ち目は無いな』

そう、誰もが思えるくらいにユウジの体は疲弊ひへいしていた。斬撃を受け止める速度が遅くなっていることに、皆気がついていった。

もう、何度目か分からない攻撃を受け止めながら、ユウジ自身も限界に近いことを自覚していた。

「ヴァン……。さ。そろそ、ろ、キツ……。く、なってきた……。んだけど」

息も絶え絶えになりながら、そう呟く。

だが、そんな小さな声をヴァンは聞き届けることが出来なかった。

そして、ユウジの体力が限界に達した時、クウダフが今までの斬撃とは比べ物にならないくらい、速く、鋭い斬撃を放っていた。

次の瞬間、ユウジの体は真つ二つに引き裂かれた……………。

「な……。！ 嘘だ……。ろ？こんな、こんな簡単に……。終わるのかっ！ 俺が……。俺のせいであ！」

ヴァンは力が入らない拳を地面に叩き付けた。

クウダフがゆっくりとこちらへ向かってきているのを感じながら、目を閉じる。

（次は俺の番か……。まさか、初戦で負けることになるなんてな

……
ヴァンは……最期の時を覚悟した。

少しの希望。そして……

「……えつとき、落ち込むのは勝手だけど、俺をそんな簡単に殺さないでくれるかな？ 俺はヴァンほど弱くはないからさ」

そう、ユウジの声が聞こえた。

「な……？ どう、して。さつき、斬られたハズなのに」

ヴァンが驚いて声のしたほうを見ると、さつきまで立っていた位置の、半歩後ろにずれた所にユウジが立っていた。

そして、今まで立っていたところには、一枚の紙くずが落ちていた。ユウジを斬ったはずのクウダフも何が起こったか、分ならず、戸惑っていた。

自分が殺したハズの人間が、すぐ傍に立っているのだから驚くのも当たり前だった。

「あれ？ ヴァンは知らなかったっけ？ 空蝉の術」

斬られたハズのユウジはそう、簡単に言った。

「空蝉の術……？ なるほど……そういうことか。いや、でも、いつの間に……？」

「いつ、どんな危険があるか分からないからね。常に、ね？ ここが、ヴァンとは違うところだよ」

そんな、ユウジの軽口に付き合うことよりも、ユウジが生きていたことに安心していた。

空蝉の術 冒険者の数ある職業の中でも、忍者だけが使える、忍術と呼ばれるモノで、『紙兵』と呼ばれる薄い人型の紙をした忍具を使って、自分の分身を作ることが出来る術。

大抵の攻撃ならば、避けることは可能だが、避けられる回数には限

界があった。

そして、その回数を超えて分身が消えてしまうと、攻撃を避けることが出来なくなってしまう。

「今、分身が一枚消えた……。と、いうことはあと二回しか避けられないのっ！」

ヴァンはまだ立てる様な状況では無い。だからといって、ユウジが一人で倒すことも不可能だった……。

驚いていたクウダフだったが、目標を定めなおしたのか、再びユウジへ向かっていく。そして、二枚目の分身もあっけなく無くなった。

「あと、一枚……。いよいよ、本当に危なくなってきたね」

また斬られた半歩横に現れたユウジはそう呟いた。忍刀を握る手にはものすごい汗をかいていた。

「くそっ！ こんな時に……俺は……俺はっ！ 何もできない……のかっ！」

ヴァンがそう呟いた時、背後から周りによく通る綺麗な声が聞こえた。

新しい出会い

「あゝあ。ホント、見てられないよね。まさか、『ディア（蝕み）』も知らないなんて……。何も知らないで冒険者ぼうけんしやになりました、みたいな感じでさ。そんなで冒険者になるうとするから、痛い目にあうのよ。初々（ういうい）しいってよりも、単なる馬鹿だよ、馬鹿！」

「まあまあ……。そこまで言わなくても……。私達もついこの間まで似たようなものだったじゃない」

「そうだけどさつ。魔法くらいは知ってたわよ」

「当たり前でしょ……。ユリは魔道士なんだから……」

ふらつきながらも立ち上がったヴァンが振り返ると、両手で持つほどの大きな棍こんを持っている子と、楽器を脇こしに抱えている子がこちらを見ながら話していた。

「え……。つと、君たちは一体……?」

突然のことに言葉が出ないヴァン。

そんなヴァンの態度を知ってか知らずか、両手棍を持った少女が呟く。

「自己紹介なら後でいくらでもしてあげるけど、君のお友達、ちよつと、ピンチなんじゃない?」

ヴァンが驚いて後ろを振り向くと、ユウジの動きが明らかに鈍くなっていた。

「っ！ ユウジ!? 大丈夫かっ!」

「あ、ヴァン。やっと起き上がったんだね。ていうか、遅いよ……」

…

「待つてる。今行くからっ!」

そう言つとヴァンはフラフラな体でユウジの元へ走っていった。

「あら。あんな体で大丈夫なのかしらね?」

「こら、ユリもそんなこと言つてないで、助けに行くよ?」

「は〜い」

能天気な声を聞きながらヴァンは走る。

そして、そんなヴァンの後ろ姿を追うようにして、二人の少女も走り出した。

バストワーク共和国の鉱山区にある、宿屋『コウモリのねぐら』

どうにか、命の危機を乗り越えたヴァン達は自己紹介を兼ねて、一休みをしていた。

鉱山区にある店にしては珍しく、ヒュームの女性が主人をしている。バストワーク出身のヴァン達には馴染みの深い所といえた。

「さつきはありがとうな。え〜っと……」

お礼を述べようとして、まだお互いに名前も知らないことに気づく。

「っと、そういえば、自己紹介がまだだったね、あたしはユリ。

さつきので分かったかもだけど、白魔道士だよ」

自分のことを白魔道士と名乗ったユリは、肩まである明るい茶色の髪に、整った顔立ちをした、ヒューム族だった。

「えっと、私はヒナギクです。吟遊詩人ですけど、少しなら白魔法も使えます」

ユリの横で楽器を持っていたアヤナミは、黒色の髪を後ろでポニテールにしている、少し鋭い目つきをしているので、怒っている

様に勘違いされることもあるようだった。だが、物腰は穏やかなので、付き合いが長いユリは気にしていないようだった。

「あたしらの紹介は終わりつと。じゃあ、そっちもお願いできるかな？」

ユリは表裏の無い明るく、快活な少女だった。そんな、彼女にヴァンとユウジの二人はペースを握られていた。

「あ、ああ。俺はヴァン。ヴァンデスデルカだ。長いからヴァンでいい。戦士をやってる」

「やってる……ねえ？ 魔法の事も知らなかったんでしょ？」

ユリが、整った顔を崩して笑う。

「なっ……まあ、そうだけど。これから覚えればいいだけじゃないか」

さっきの失態をズバリと突かれて、ムツとしたヴァンは言い返していた。

「はあ……。そんなこと言ってるから、俺が危ない目に合うんだよ……。ホント、死ぬかと……。えと、ユウジマルです。ユウジって呼んでもらって構いません。忍者やってますけど、一応、シーフの技も使えます」

そんなヴァンに釘を刺しつつ、自己紹介をするユウジ。

四人それぞれの紹介が終わったところで、ユリが話し始める。

「自己紹介も終わった……。つと。まったく……。初心者にも程があるんじゃない？」

ユリはそう言っつてジト目でヴァンの方を見た。

「……。だから、悪かったつて。それに、俺の周りには『魔法』なんて使える奴、居なかつたし」

「先に言つとくけど、俺の空蟬うつせみの術も一応、『魔法』だからね？ それに、知識として知っておくべきだったんじゃないの？ だから、昔から本を読めつて言つたんだよ……」

ユウジがため息を吐きながらそう呟く。

「ユウジのアレも魔法だったのか……。俺だつて、反省はしてる。

だから、教えてくれないか、『魔法』って一体、どんなモノなんだ？」

ヴァンが素直にそう言うと、ユリが立ち上がって、咳払いをした。
「もう、しょうがないなあ。じゃあ、あたしが教えてあげる。長くなるかもしれないけど良い？」

「ああ。構わない」

「ん。簡単に言うと、『魔法』ってのはね、この世界　ヴァナ・ディール　に宿る、八つの元素の力を借りて、色んな現象を引き起こすモノ。ちょっと抽象的ちゆうしょうてきすぎて分からないかも。で、その『魔法』には大きく分けて二種類あるのね。一つはあたしやヒナが使える『白魔法』。で、もう一つは『黒魔法』ね。ここまでは平気？」

「あ、ああ。なんとか……」

戦士のヴァンにとつて、『魔法』なんてモノは縁の無いものだと思っていた。

だが、冒険者として、一人前になる為には、色んなことを知っておく必要があるのだと、身を持って経験していたので、聞き流したり、無碍むげにしたりする訳にはいかなかった。

「じゃ、続けるね。で、『白魔法』っていうのは、主に癒しや補助とかの、光の力を行使する魔法のこと。さっきの戦いであたしが使ったケアル（癒し）とか、プロテス（護り）なんてのがそう。戦闘で負おった傷を治したり出来るの。でも、白魔法も万能じゃなくて、怪我の治る速度が速くなったりするっただけで、無くなった腕や足が元に戻ったり、死んじやつたりした人を治すことは絶対出来無いの。だから、そこだけは注意。わかった？」

「ああ。それはさっきのこと分かってる。大丈夫だ」

これだけ長い間、ヴァンにとつては難しいと感じる話をユリは話し続けている。

ユウジやヒナギクは暇なんじゃないんだろうか……。そう、関係の無いことさえも考えてしまうヴァンだった。

「よし、じゃあ、次は『黒魔法』ね。こっちは『白魔法』の逆で、主に敵を攻撃、足止めとかの闇の力を行使する魔法。黒道士の人が使ってるわね。この場には使える人は居ないけど。あとは……：うね。厳密に言つとこのほかに『赤魔法』とかユウジやヒナの使ってる『忍術』・『呪歌』も魔法の一つね。それに、あまり見ないけれど、『召喚魔法』を使う人もいるかな。まあ、そのうちそういう人たちにも会えるでしょ。まあ、大まかに種類分けするとこんな感じよ。あとは、実戦で覚えていくしか無いわね。」

そう締めくくると、ユリは頼んであつたオレンジジュースを飲みほした。

「ありがとうな。勉強になつたよ」

ヴァンは心からそう思っていた。ユウジの使う忍術も魔法の一つだと聞いて驚きはしたが、それでも、周りには魔道士なんて居なかつたのだ。だから、貴重なことを聞いたと思つた。

「いいよ、冒険者ぼうけんしやだもん。これくらいは知っておかないとね。またどこかで負けられても後味悪いし」

ユリはそう言つて自分の席へ座り込んだ。

「さて、ヴァンが魔法を学んだことだし、これからのことを話しておかない？」

話がひと段落したと思つたのか、ユウジが会話を仕切る。

「そうですね。そのほうがいいと思います」

今まで黙つて聞いていたヒナギクも会話に入ってくる。

「ん〜。とは言つても、俺とユウジは目的なんて無かつたよな？」

冒険者にはなつたが、これと言つてやることを決めていなかったのも事実だつた。

「まあね。そういえば、ユリ達はどうしてバストワークへ？」

今更、と言えるくらい遅いが、ユウジが聞いていた。

「んとね、元々あたし達の出身はバストワークなの。で、ウィンダスから来てた使者の人を案内してたの……。でも、はぐれちゃって。それで、その二人を探してウロウロしてた時に君達がやられそうなのを見つけたのよ」

『やられそう』のところを強調してユリが言っていた。

「あはは……。ユリってば……。そうなんです。初めての国で、不安になっていないといいんですけど……」

ヒナギクが心配そうに言ったと同時に、『コウモリのねぐらの扉が開いた。

目的

「つと、やっと見つけた。ごめんねえ。はぐれちゃって。でも、見つかってよかったよ。ね？ レインっ」

「ああ……。そうだな。ったく、お前はホントいつでも元気だよなあ……」

静かだった店内が急に賑やかになった。

入ってきて早々、騒いでいる二人組（正確にはうち一人だが）を皆で揃って見つめる。

「「あっ！」」

ユリとヒナギクが同時に声をあげていた。

「どうしたんだ。二人とも」

ヴァンが不思議そうに尋ねた。

「さつき、話したでしょ。ウィンダスからの使者の人と一緒にだったけど、はぐれちゃったって」

「あ、ああ。じゃあ……。もしかして……。？ あの二人が？」

二人へヴァンとユウジが目を向ける。

入り口で騒いでいた二人はやっと落ち着いたらしく、こちらへと向かってきていた。

「やつほ。ホントごめんねー。まさかはぐれちゃうとは思わなくて……。あの子に会わなかったら、再会できなかったかもだよー」

「無事でよかったです。心配してたんですよ。で、『あの子』って？」

ヒナギクが再会早々、疑問を口にしていた。その横でユリも不思議がっていた。

「ん？ ああ。二人とはぐれてから、サクと二人で探してたんだけど、なかなか見つからなくてね。で、そのときにヒュームの女の子と会って、一緒に探してくれてたんだ」

「でね、とりあえず、冒険者ぼうけんしゃが休憩するなら、モグハウスか、宿屋かな？ ってことになってね。私達はモグハウスの手続きをしないから、こっちに来てみたってわけ。でも、まさかホントに会えるとは思ってなかったよ」

見知らぬヒュームとミスラ族の二人組の登場に、ヴァンとユウジは完全に蚊帳の外だった。

「なあ、ユリ。再会を喜び合うのはいいことなんだが、そろそろ紹介してくれないか？」

自分抜きで話が進んでいく状況に我慢し切れなくなったヴァンがユリにそう催促していた。

「っと、そうだったね。ごめんごめん。えっと、こちらの二人がウィンドスから来てる、レインさんと、サクさん」

「レインです。赤魔道士だけど、黒と白の魔法も多少は使えるかな。あと、剣技も少し。で、こっちは一緒に冒険してる、相棒パートナーのサク」

そう言って、ミスラのほうを指差す。

「サクだよ。竜騎士やってるんだ。今、ウチの子は呼べないから、この中で眠ってるよ」

サクがそう言って取り出したのは、一つの丸いボールみたいなものだった。その中に、飛竜と呼ばれるワイバーンが眠っていた。

レインはセミロングの茶色の髪を適当に伸ばしている、爽やかそうなヒューム族の青年だった。魔道士と言っていたが、ローブを着ている訳ではなく、ユウジ達が着ているような、軽装の防具を身にまとっていた。そして、腰にはホーリーソードと呼ばれる片手剣を差していた。

サクはミスラ族と呼ばれる、南国の島を出身としている種族で、特徴的なのは、ヒューム族や他の種族ならば、頭の横にある耳が、頭の上に付いているということと、長い尻尾が生えている、ということだった。一言で表すのなら、猫の様。尻尾が右へ……左へ……と気ままに揺れていた。騎士と言った通り、重そうな鎧を着込んでいた。そして、背中にはハルバードと呼ばれる、両手槍が見えた。

「で、こっちがさつき知り合った新米冒険者の二人で……」

「俺はヴァンデスデルカ。ヴァンって呼んでくれていいよ」

ヴァンはユリが言おうとしたのを遮って、自分で名乗っていた。

「ったく……。初対面の人に向かってそんな言い方ないだろ。えっと、俺はユウジです。よろしくお願ひしますね」

「ああ。二人とも。よろしくね」

ヴァンの態度にもレインとサクは笑顔だった。

こうして、ヴァン達に新しい知り合いが増えたのだった。

「そういえば、レインさん達はどうして、ウィンダスからバストワークへ？」

『コウモリのねぐら』で出会った新たな二人を加え、これからどうするかを話し合っていた。

「ん？ ああ。そういえば、そうだったね。一応、秘密ってことになってるんだけど、まあ、君達になら話してもいいかな」

「そうだねー。んと、ウィンダスから、バストワークの内情についてちよつと調べてきてって言われてるの」

レインとサクによると、ウィンダス連邦からバストワーク共和国ともう一国家のサンドリア王国の現状を調べて来いとこの要請らしかった。

「なるほど……。って、それは要するにスパイってことですよね？」

ユウジが冷静に分析していた。

「あたし達もそう思ってたんだけどねー」

ユリとヒナギクも頷いていた。

「まあ、他国からすれば、そう思うかもしれないね。でも……」

「戦争や外交のために調べようとかじゃなくて、定期的に他国の国政を調べようってことみたい。同じようなことをバストワークもサンドリアもしているみたいだよ」

と、レインとサクが説明してくれた。

「そんなこと、全然知らなかったなー。まあ、冒険者になってそんなに日が経ってないから当たり前か……」

ユリがそう、呟いていた。

「でさ、四人に聞きたいんだけど、最近バストワークで変わった

こととか、困ってること、問題になってることって何かないかな？」
ヴァン、ユウジ、ユリにヒナギク。皆、バストワークで幼いころから暮らしてきた者達。

バストワーク建国以来、悩みの種になっていることがある。それは、バストワーク出身者なら、誰しもが知っていること、そして、身を持って実感していることもある。

そして、何故かその問題が最近になって顕著になってきている……
そう感じているのも事実だった。
その問題とは、

「あることにはあるよ。もう、昔からのことだけ……」

「そうだね。他にも色々あるかもしれないけど、これが一番かな」

「うん。あたしもそう思うよ」

「そうですね。解決……とまではいなくても、なんとかすることができれば……」

四人とも同じ問題を挙げていたようだった。それほどまでに、バストワークでは当たり前前の問題だった。

「何か、あるみたいだね。もしかしたらなんとか出来るかもしれない。良かったら話してくれないかな？」

四人は顔を見合わず。そして、ユリが話し出した。

「少し長くなるかもしれないけど、ごめんね」

そう前置きしてから、バストワークの歴史についての^{へんれき}遍歴が語られた。

バストワーク共和国。ヴァナ・ディールのクオン大陸の南西に、ヒューム族とガルカ族の一部が建国した、技術国家。伝統のある騎士団を持つ、サンドリア王国や、優れた魔法を持つ、ウィンダス連邦に比べるとその歴史は浅いが、国家の規模は他の二つに劣らない。その理由は、ヒュームの産業に対する、異常なまでの嗅覚がバストワークの急速な発展に^{つな}繋がったからだった。

彼らは、グスタベルグ地方にある、『グスゲン鉱山』や『パルプ口鉱山』などを中心に、掘削をしようと目論んだ。しかし、実際に掘削作業を行ったのは、ヒュームではなく、ガルカだった。屈強な力を持ち、鉱山開発、鍛冶技術が優秀なガルカと共にバストウークを繁栄へと導いてきた。が、次第に効率だけを追い求める彼らの考え方を理解できないガルカ族との確執が大きくなっていた……。

ガルカ族とは、はるか昔、故郷をアンティカ族と呼ばれる、巨大な蟻ありに滅ぼされてから、世界各地を転々としている種族。そして、その一部がヒュームと共に、バストウークを建国したのだった。ガルカの特徴は、強靱な肉体を持ち、その見事な体軀たいくが生み出す、腕力にある。そして、一番、他種族と違うところは、寿命が尽きることを悟ったガルカは一人『転生』の旅へ出る。『転生』の際、全ての記憶を失い、新たな体を得て、再出発することとなる。が、稀に一世代に一人、種族の全ての記憶を継承する『語り部』と呼ばれる者が現れる。彼は、ガルカ達にとって、種族の長であり、崇拜の対象となっていた。その『語り部』が消息を絶つて以降、ガルカ達の間では不安や動揺が広がっていた。

「と、まあこんな感じ。原因は分からないけど、明らかにみんなの態度が変わってきているの」

バストウークで一番大きな問題。それは、バストウーク共和国を他の二国と同じくらい発展させようとして、効率だけを追い求めてきたヒュームと、発展のために協力をしたが、そのやり方に納得がいかないガルカとの大きな溝だった。

「なるほど……。ウインダスも二種族が共存してるけど、目立った衝突は今のところ無いね」

「ウインダスでもバストウークの話は聞いていたけどね。やっぱり、その国の人達から聞かないとね」

海を渡った別の大陸にあるはずの国でさえも話が持ち上がるのだ。それほどに有名な問題なのだろう……。

「じゃあ、レインとサクが領事館に行ってみればいいんじゃないのか？」

ヴァンが名案を思い付いた、という口調で皆に提案する。

「うーん。それはどうか」

ユウジが首を捻る。

「どうしてだよ？ ウィンダスからの正式なミッションなら何とかなるんじゃないのか？」

そうヴァンに言われ、ユウジが更に顔をしかめていた。

「国からの正式なミッションだから……余計に難しいかもしれない。いくら正式なミッションで、バストワークとウィンダスが同盟国だからって、国の内情を知られたくは無いはずだよ」

ヴァンはウィンダスからの正式な任務ミッションであれば、バストワークも協力するだろう、と思っていたのだ。だが、現実はそのなにごとにも甘くなかったのだ。

「ユウジの言う通りだったよ。ここに来る前に俺とサクが大工房だいこうぼうにある、領事館に行ってきたんだけど、『お教えすることは出来ません』って言われてさ。対立のことは勿論、それ以外のことでさえも聞けなかったよ」

大工房とは、鉱山区の隣にある、商業区から行けるバストワークの中心とも言える施設で、一階部分には鍛冶ギルドや、黒鉄・火薬・サーメット（硬度金属）などを研究している場所があり、中心にあるエレベーターを利用して二階に上がると、エレベーターの動力である水車や大統領官邸プレジデント、各国の領事館など政治に関する建物が集結している場所だった。

「そうなんだよ。まさか、ウィンダス領事館であんなこと言われるなんて、思ってもみなくて……。でも、ユリ達に話が聞けて

よかったよ」

少し暗い顔をするレインをよそに、サクの表情は明るかった。

始動

「あ、そういうえば、数日前に少し変な話を聞いたんです」
急に思いついた様にヒナギクが声をあげた。

「ん？ どうしたの？ ヒナ」

「変な話？ それは、気になるね……。良かったら聞かせてくれるかい？」

「えっと、わかりました。ただ、小耳に挟んだだけなので、あまり期待はしないでくださいね？」

そう言うと、ヒナギクは話し出した。

「この前、商業区へ買い物に行った時、噴水広場の所で、ガルカの鉱山夫の様な人達が話をしていたんです」

ガルカ達が話していた内容とは、ここ数ヶ月、鉱山へ掘削に行つたガルカ達が悉く行方不明になっている……。とのことだった。

原因が未だに究明されていないので、一部の過激なガルカ達はヒュームが何か策を巡らしているのではないかと噂になっているらしい。という話までであった。

「なるほど。もしかしたら、これが原因なのかもしれないな……。今までは対立と言ってもそんなに激しいものではなかった。だが、最近になってその均衡状態が崩れつつあった。

「そうだね……。ただ、これが本当のことかどうか、わからないよね」

「じゃあ、とりあえず、何か行動を起こすとしますかっ！」

そう言って、ヴァンが立ち上がった。

「え？ どうしてヴァンが？ これはウィンダスからのミッションだよ、バスターワーク国民の君が出来ることじゃない」

レインは、ヴァンが一体何をしたいのかよく分からなかった。

「そうだろうけどさ。いきなりバストワークに来て、領事館にも行けないんじゃない、どうしようもないだろ？ 少しでも力になればなってる」

ヴァンは笑顔でそう言った。

「やつぱり……ヴァンならそんなこと言い出すだろうって思ったよ。ってことで、俺も付きあわせてもらうよ。冒険者同士の協力なら出来るハズだからさ」

ヴァンの隣に座っていたユウジも立ち上がった。

「なんだ。ヴァンとユウジもそのつもりだったんだ。てっきり、あたし達だけかと思ってたよ。ね？ ヒナ」

「そうね。でも、良かったじゃない。私達だけだとちょっと不安だったし……」

ユリが、まあねと笑いながらヒナギクと共に立ち上がった。「え？ いや、ちょっと待って。どうしてみんなやる気なのさ？」レインが困った顔をして聞いていた。そんな困り果てているレインの横でサクは笑みを浮かべていた。

「だから、さっきヴァンが言ったじゃない？ バストワークのことならあたし達に任しときなさいよっ！」

ユリは自分の胸を叩きながら言い切っていた。

「でもさ、やつぱり迷惑でしょ？ ムリして手伝ってくれなくてもいいんだよ？」

「レインさん、たぶんヴァンさんもユリもそんなこと思ってないと思いますよ。きつと……」

ヒナギクのあとをユウジが引き継いでいた。

「そうだよ。ユリはともかく、ヴァンの本当の理由は……」

「まあまあまあ、いいじゃないか！ みんなでやったほうが早く解決するかもしれないじゃん！」

ユウジが言い終わる前にヴァンがそう締めくくっていた。

（はあ……。ヴァンの奴）

ユウジは誰にも分からないくらいの小さなため息を吐いたのだ
た。

「でも、ホントにいいの？もしかしたら危険な任務になるかもし
れないんだよ？」

「大丈夫だって。それに、いい経験になりそうだし」

ヴァンはもう行く気満々だった。そんなヴァンの横で、

（ヴァンの奴、冒険者になったは良いけどすることなくて暇だっ
たんだなあ……。だから、レインさん達を手伝おうなんて……。ホ
ントに……）

（あはは……。やっぱりそうだったんですね。まだお二人と出会
って間もないですけど、ヴァンさんの性格はなんとというか分かりや
すいんですね。真っ直ぐ……。っていうか。まあ、でも理由はどう
あれ、手伝おうって言ってますし、良いんじゃないですか）

（まあ、ね）

ユウジとヒナギクが小さな声で話をしながら笑いあっていた。

「レイン〜。みんな手伝ってくれて言うんだからさ、甘えち
やおうよー。私達二人だけだと正直キツイと思うよ？」

今まで笑っていたサクがそう言った。

「確かにそうだな……。じゃあ、みんな、お願いしてもいいかな
？」

「ああ。もちろん！」

「元々そのつもりだったしね」

「うん。いいよ〜。なんか面白くなってきたかも」

「ええ。構いませんよ」

レインの頼みに、四者四様の反応で答えていた。

「ありがとう。それじゃあ、早速、これからどうするか相談なん
だけど……」

こうして会って間もない六人の任務が^{ミッション}始まったのだった。

ヴァン一行が、『コウモリのねぐら』で、相談しているのと同じ刻^{とき}。

バストワーク共和国、大工房の大統領官邸^{プレジデント}で話をする二つの影があった。

「この任務^{ミッション}、任せても構わないか？ ショウキ」

官邸に響き渡るほどの低い声の持ち主は、バストワーク共和国ミスリル銃士隊^{じゅうしたい}？3にして副隊長のアイアンイーターだった。名前を聞いただけでは、どこぞのモンスターと勘違いされてもおかしくないが、この呼び名はヒュームが勝手に付けたもので、本名はちゃんと別にあつた。

彼は、軍人にしては珍しく、人や物事の本質をしっかりと見つめ、何を成すべきかを冷静に見極めることが出来た。そして、ヒューム族と自分達、ガルカ族との対立に一番真剣に取り組んでいる人物でもあつた。

「お任せください」

そう答えたのは、レインとさほど年が変わらないように見えるヒュームの男だった。ショウキ、と呼ばれた彼は重そうな防具を身につけ、いかにも騎士と呼ばれるのが相応^{ふさわ}しい格好をしていた。

「すまないな。本当は俺が直接動きたい問題なのだが、立場上、表立って行動することが出来ない……」

アイアンイーターはショウキに向かって頭を下げた。

「いえ。分かっています。あなたがどれだけ悩んでいるかということも。ですから、私にお任せください」

そう言うとショウキは振り返って、大統領官邸の外へ足を踏み出したのだつた。

会議……？

「で、なんにしても情報が足りないんだよね。だからといって、領事館には行っても意味ないから……」

手伝うと言ってくれたものの……と前置きしながら、レインがそう呟いた。

「そうだね。本当なら領事館に行くのが当たり前なんだけど……」

「ホント、こんなときくらい、協力してもいいと思うんですけどね」

皆、それぞれの意見を言い放っていた。

「じゃあさ、街の人達に聞いてみるしかないんじゃない？」

サクが良い事を思いついた、という風に元気良く提案していた。

「……。そうだな。やっぱりそれしか無いか……」

「ですかね……。はあ……」

レインとユウジが呟く。

「あれ？ あれれ？」

サクが、どうして？という風に首をかしげていた。

「なんでそんなに乗り気じゃないんだよ？ 二人とも」

ヴァンも同じことを考えていたようで、ユウジとレインが溜息を吐いていることを不思議がっていた。

「さっきのヒナギクの話、聞いてなかったの？」

「聞いてたさ。ガルカの鉱山夫が行方不明になってるんだろ？」

ヴァンがそう言うと、レインが呟いた。

「そう、そこが問題なんだよね……」

「今、僕たちが知りたいのは、どうして鉱山夫が行方不明になったのかってこと。それについて一番詳しいのは、同じ鉱山夫の人達だと思うんだ」

「そう。でね、ヴァン。鉱山夫って、ヒュームの人より、ガルカのほうが多いんだよ。体格がいい分、どうしても……」

レインの後をユウジが引き継ぐようにして話した。

「あつ！ そっか。ってことは……」

サクがわかった！という風に元気よく声をあげた。

「ん？ どういうことだよ？？んん？」

「はあ……。サクさんは分かったってのに、どうしてお前は……」

「あはは……」

ヒナギクが乾いた笑いをこぼしていた。

「つたく、鉱山夫の人に話を聞きに行くってのは、もちろんなんだけど。ヒュームの人達だけって訳にもいかないだろ？」

「ああ、そうだな」

「だから、必然的にガルカの人にも話を聞くことになる。でも、この行方不明事件が起こってから、ガルカとヒュームの仲は悪くなっていく一方だ。そんな時に、ヒュームばかりの人間がそろそろと話を聞きに来たら、どう思う？」

そういうことだった。普段なら、何の問題のないことだっただろう。だが、『語り部』がいなくなり、自分達の仲間まで行方不明になっている。

そんな時に、ヒュームばかりの集団にいきなり話しかけられたらどんな対応をされるか、想像がつかなかった。

「ああ。なるほど……。そういうことか」

「やっと分かったの？ ホント、バカなんだから……」

ユリが溜息を吐きながらヴァンに向かって言った。

「あは……。は。まあ、ヴァンさんらしくていいじゃないですか」

ヒナギクがよくわからないフォローを入れようとするが、

「ホント、ヴァンは昔っからバカだよ。ま、そこがヴァンらしい、のかもしれないけど」

ユウジがトドメをさしていた。

「あれ……？ えっと……。そんなつもりは、無かったんですけ

ど……」

ヒナギクが小さく溜息をこぼすのを苦笑いで見ながら、レインが言った。

「だから、ガルカ達に直接話を聞きに行くのは最終手段かなって思ってるんだけど……」

「そうですね。だから、何か別の方法があれば、一番いいんですけど」

「やっぱりヒナもヴァンのことバカって思ってたんだー」

「や、そんなこと言いつもりは無かったんだって！」

「ユリはともかく……。ヒナギクまで……。俺は……。俺はっ！」

「え、っと、ヴァンさん？ 私、全然そんなこと思ってないですよっ」

「あれ、そうなの？ ヒナ。正直に答えちゃいなさいよっ。ちょっとは思ってるでしょ??」

「え？ まあ、少し……」

「……。やっぱり、ヒナギクだって俺をバカだって……」

「あう……。えっと、どうしたら……」

ヴァンとヒナギク、ユリが後ろで騒いでいる間、レインとユウジがこれからのことについて纏めていた。

「それじゃあ、初めは鉱山区以外の場所から聞いていきますか」

「そうだね。何か情報が掴めればいいけど……」

「まあ、ともかく、先ずは行動だよ」

最後はサクが上手く締めていた。

「後ろで騒いでる三人、そろそろ話聞かない??」

「あ、ああ。悪い。ちょっと落ち込んだ」

「アンタは元からバカなんだから、今更気にしても遅いでしょ！」

「ああ。そうだよなあー」

ヴァンにはもう、反論する気力も残っていないかった。

「ちよっと、ユリ！ またそんなこと言って！」

「あー。もう、ヴァンがバカなのは分かったから。とりあえず、これからどうするかだけでも聞いてくれ」

また騒ぎ出す前にユウジが場を纏めていた。

「なんだか、みんな仲いいよね」

サクが呑気なことを言っていた。

行動

「さっき、レインさんが鉦山区に行くのは最終手段って言ったのは覚えてるよね？」

「ああ」

「ん。だから、先に別の所から聞き込みをしていこうかなって思ってる。で、もし何も手がかりが得られなかったら、危ないかもしれないけど鉦山区へ行こう」

ユウジが皆にそういった時だった。

「……でもさ、六人もいるんなら、別々に聞き込みしたほうが効率よくないか？ バストワークも結構大きい街だし」

ヴァンがそう言い出していた。

「まあね。そうなんだけどさ、やっぱり危ないでしょ」

「そうかもしれないけど、いつかは鉦山区へ行かなきゃならないじゃん。なら、後から行っても先に行っても同じだと思う。それに、鉦山夫が行方不明になってるなら、鉦山区へ行ったほうがちゃんとしたこと、聞けるんじゃないか？」

ヴァンのその一言にユリとヒナギクも頷いていた。反対にユウジとレインの顔は歪んでいた。「確かにそうかもしれないね……。どうする？ 六人で同じところを回ってたらすごい時間がかかるかもしれない」

レインがユウジに提案していた。

「はあ……。……うん。じゃあ、危険を承知でそれぞれ別々のところへ行こう。ただし、人選は任せてもらっていいよね？」

ユウジがそう、妥協案を出していた。

「まず、商業区の聞き込みは、俺とユリで。一番広い場所だから、

出身者のほうがいいだろうしね」

「了解」

ユウジがそう言うとユリが立ち上がってユウジの隣へ移動した。

「で、次。港に行ってもらうのは、ヒナギクとサクさん。サクさんはウインダス出身だから、誰かと一緒にのほうがいいかなと思って」

「はい」

「よろしくお願いしますね。サクさん」

ヒナギクとサクも一箇所に集まった。

「よし、じゃあ、最後の鉱山区。ホントは皆で行きたいんだけどね。ヴァンが我侬を言い出したから……。もちろん、行ってもらうのはヴァン。それとレインさん。ヴァン一人だけだと、勝手に暴走しそうですし……。危険だと思いますが、よろしくお願いしますね。レインさん」

「うん。任せといて」

「ユウジ！ 俺だってそんな子供じゃないだから、勝手なことなんてしないぞ！」

ヴァンがユウジに言っていた。

「はいはい。何事も無く帰ってきたらちゃんと謝るから。だから、揉め事を起こさずに帰って来い」

商業区へはユウジとユリ。港にはヒナギクとサク。そして、鉱山区へはヴァンとレイン。

そんな、二人一組のチームが出来ていた。

「じゃあ、今からそれぞれ行動してもらうけど、無理はしないこと。聞き込みだけだけど、どんなことが起こるか分からない。特に鉱山区は。だから、十分注意して。で、日が暮れる前にまたここに集合ってこと」

皆、ユウジの言葉に頷いて移動を開始した。

商業区

バストウーク商業区。この国の商業・政治の中心地。だからこそ、ほとんどの情報がここに集まることになる。

「でも、まさかユウジがヴァン達を鉱山区へ行かせるとは思っ
てなかったよ」

商業区へ入り、炎水の広場へ向かっている途中、ユリがそんなこ
とを言い出していた。

「あはは。そりゃ、俺だって本当は行かせたくないよ。ただでさ
え、ガルカとヒュームの仲が悪いってのに、今は余計にギクシヤク
してるし……。でも、ヴァンは一度言い出したら絶対に曲げない奴
だからさ。それに、時間がかかるのも事実だったし。ってことで、
レインさんにお守りを頼んだんだ」

ヴァンとレインを一緒に行かせたのは、バストウークを知らない
レインを一人に出来ないというのと、ヴァンの暴走を止めてもらう
という目的があった。

「なるほどね。さすが、付き合い長いだけあって、ヴァンのこと
よくわかってるじゃない」

「そりゃね……。それに、分かり易い性格してるしね」

「あはは。それは同感」

ヴァンのことで盛り上がりながら、競売所がすぐ近くにある、炎
水広場までやってきていた。

「さて、ここだと人も多いし、色んな話が聞けるかな。それにヒ
ナギクが聞いたつてのもここだったみたいだし……」

「そうね。何か手がかりが掴めたらいいんだけど……」

商業区は鉱山区と違って、ガルカの姿が圧倒的に少なかった。そ
の分、重要な情報は聞けそうになかった。だが、ヒュームの中にも
何か知っている人間がいるかもしれない、そう二人は考えていたの

だった。

「ねえ、ユウジ」

「ん？ どうしたの？ ユリ」

「あそこにいる、あの人」

そう言いながらユリは少し離れたところにいるヒュームの人を指さした。

「うん？ あの人がどうかした？」

「あの人、さっき大工房から出てきたよ。もしかしたら、何か知ってるかもしれないよっ！」

「ちよっ。待ってっ！！ 大工房から出てきただけで、そう決め付けるのは早いっ！」

ユリに向かつて叫ぶユウジ。だが、そのユリは前に立つヒュームへ向かつて駆けだしていた。

（つたく、どうして俺の周りに集まる奴は人の話を聞かない奴ばかりなんだ……っ）

ユウジは溜息を吐きながら走って行ったユリを追いかけていった。

「あのっ！ ちょっとすいません」

「ん？ 何か用？」

（ああ……。間に合わなかったか……）

ユウジが追いついたときにはユリがもう声をかけていた。

「急にこんなこと聞いて申し訳ないんですが……。今、大工房から出てきましたよね？ 何か、用事があつたんですか？」

普通、見ず知らずの人間にこんな風に問われたら怪訝けげんに思うだろう。それに、大工房にも様々な場所がある。領事館だけに用がある人の方が少ないだろう。

ユウジならもう少し遠まわしに聞くことも出来るはずだった。だが、ユリはそんなことを考えてはいなかった。

「そんなことを聞いてどうするんだい？ 見たところ、君達冒険

者だよな？ 何かあったのかな？」

そのまま無視されても仕方のない状況だったのに、逆に質問されていた。そして、そんな事を予測していなかったのか、ユリは口を半分開けたまま動きが止まっていた。

「え、えつと、その……、あ……の……」

「つたく、しょうがないな……。すみません。急に話し掛けてしまつて。あなたの言う通り、俺達は冒険者です。そういうあなたも、でしよう？」

ユウジがそう問うと、目の前の男は口元を少しだけ緩めて笑つた。

「そうです。大工房へはミスリル銃士隊から呼び出しがあつたから……なんですけどね」

「……っ！！ ミスリル銃士隊！？」

「ホントにっ！？」

動きが止まっていたユリや、普段冷静なユウジがそこまで驚くのは理由があつた。

ミスリル銃士隊とは、もともと大統領直属の特務隊として誕生した。そして、長い年月の間に、大統領の警護はもちろん、情勢に応じて他国への諜報、更には任務の指揮や冒険者への指導など非常に多彩な働きを見せるようになっていた。

バストウーク共和国の軍事・警察機構の顔とも言える存在だった。

そんなミスリル銃士隊から直々に要請が来る、ということとはそれだけ重要な案件であり、信頼に足る人物、ということだった。

「自己紹介が遅れたね。僕はシヨウキといいます。先ほども言いましたが、冒険者ですよ」

シヨウキと名乗った男は、短く刈り上げた明るめの茶髪に、髪と同じ色をした目をしていた。顔だけ見ていると少し怖い印象があるが、口調が穏やかなので、人懐っこい雰囲気があつた。

「えっと、俺はユウジです。で、横にいるのが……」

「ユリって言います。よろしくねっ！」

硬直から回復したのか、ユリが元気よく挨拶していた。

「こちらこそ。……見たところ、二人は忍者と白魔道士かな？

違つてたらごめんね」

「……分かる、んですか？」

二人は、自分達のジョブ（職業）を当てられるとは思っていなかった。シヨウキと出会ってから驚かされてばかりだった。

「当たってた？ っんー。防具や武器で大体の予想は付くかな。あとは、その人が持つ雰囲気……みたいなモノで」

「へえ……。すごい……」

ユリはただただ関心していた。

「じゃあ、お返しと言つては何ですが……。シヨウキさんは、ナイト（騎士）ですよね？」

「そうだよ。よく分かったね」

「そりゃ、それだけの装備を着ているジョブなんて、限られますからね」

「あははっ。それも、そうだね」

シヨウキの物腰に二人は好感を抱いていた。

「さてっ。じゃあ、そろそろ聞かせてもらおうかな」

シヨウキは二人に向かって言った。

「そうですね。シヨウキさんの事を伺^{うかが}う前にこちらのことを話しておかないと駄目でしょうし」

「だね。えっと、あたし達、今、ガルカの鉱山夫の人達が行方不明だつてことについて調べてるの。で、大工房から出てきたつてことは、もしかしたら領事館とかで話を聞いてきたのかなつて思つて、まあ、まさかミスリル銃士隊から直接話を聞いているとは思わなかつたけど……と、ユリがぼそつと呟いた。

「ああ。なるほど。だから、僕に声をかけたんだね」

「そういうことです。で、実際の所、どうなんです?」

「ふう……。うん。その通りだよ。僕はミスリル銃士隊のアイアンイーターから任務ミッションを受けた。その内容を言うことは本来ダメなんだけどね。君達の話話を聞く限り、どうも同じ事件みたいだし……」

「やつぱり……。領事館は表沙汰にしてないけど、気にはしてるみたいね」

「そうだね。それに、ミスリル銃士隊が動いている……。ということとは、それだけ大きな事件なのかも」

「えっと、話していいかい?」

手がかりを得ることの出来た興奮からか、シヨウキのことを置いてばかりで二人は話し合っていた。

「……。っ。すいません。どうぞ」

「僕は今回、任務ミッションをミスリル銃士隊から受けた……。というよりか、アイアンイーターから受けたと言っている。どういふことかと言うと……」

つまり、ミスリル銃士隊や領事館・大統領官邸プレジデントはガルカの鉱山夫達が行方不明になっている事を知っている。が、バストワーク共和国の役人は大半がヒュームで構成されている所せい為か、今はまだ静観……。という方針しかかった。だが、ミスリル銃士隊の?であるアイアンイーターは、その決定に納得がいかなかったのだ。だからこそ、彼は周りの誰にも了承を取らず、極秘でシヨウキに任務ミッションを与えていた。

「ふうん。いくらヒュームとガルカの仲が悪いって分かっても、見て見ぬ振りなんて……。納得いかないよっ!」

事情を聞いたユリが憤慨していた。

「そう。だから、僕はこの任務を受けることにしたんだ。ただ、もし僕が勝手に動いていることを知られると、大事になりかねない……。だから、内密に動く必要があるんだよ」

いくらミスリル銃士隊の？であったとしても、極秘の情報を冒険者に流し、その事件の解決を依頼した……ということが明るみに出てしまえば、処分は間違えない……。そういうことだった。

「そう、ですよ。でも、シヨウキさん一人だとやっぱ無理がありますよ。俺達も協力させて下さい」

「そうよっ！ ようはバレなきゃいいんですよ。バレなきゃ。皆でサクッとやって解決しちゃいませよ」

ユリがそう、宣言していた。

「あはは……。なんだか、君達と一緒にいると、本当に出来そうな気がするよ。ん、君達の仲間に加わらせてもらおうよ」

「こちらこそ、よろしくお願いします。え、と、詳しい話は仲間と合流してからで構わないですよね？」

「そうだね。それでいいよ」

「分かりました。じゃあ、行きましようか」

ユウジとユリ、そしてシヨウキを加えた三人は待ち合わせ場所へと戻って行った。

港

バストウーク港。貿易のための倉庫や、様々な酒場が立ち並ぶ場所。商業区や、鉱山区ほどではないが、バストウークの民が集まる場所ではあった。

皆と別れたヒナギクとサクは、商業区を抜けて港へとやってきていた。

「この名所って、飛空艇ひくうていの発着時に開閉する跳ね橋なんですよっ！」

「ほえ〜。そんなのあるんだ？ さすが、技術大国だよなー」

飛空艇とは、クリスタル推進機関すいしんきかんと古の設計図いにしえを基に、バストウーク共和国の天才技師、シドが指揮して作り上げた『空に浮く船』。今となつては、各国の重要な移動手段となっている。現在は、バストウーク共和国・サンドリア王国・ウインダス連邦、そしてジュノ大公国の四国よんこくを結ぶだけだが、以前はエルシモ島と呼ばれる島にも飛空艇ひくうていの行き来があった、という話だった。

「そういえば、サクさん達、ミストラの人の出身って南の方なんですよね？」

「うん。そう言われてるね。あたしはウインダス生まれだけど」
エルシモ島にある、カザムよりもっと南にミストラ達の故郷があった。

「やっぱり、行きたいって思いますか？」

ヒナギクがそう聞くと、サクは少し悩むような素振りを見せて答えた。

「うん。あたし達ミストラって、自分達が今、住んでいる場所を大切にする風習があるんだ。だから、あたしにはウインダスのほうが故郷って感じかな」

「なるほど、そんなんですか」

話しているうちに二人は、ベリゲン広場までやってきていた。

「うーん。やっぱり、酒場に人が集まるのって、日が暮れないとダメですね……」

「だよねえ。どうする？」

「そうですね……。せつかくなので、跳ね橋が上がるの、見ます？」

「いいのっ!?! 見たいっ!」

「あはは。分かりました。じゃあ、ここで少し休憩しましょうか
そう言つとヒナギクはベリゲン広場の端に座る。それを見てサク
もヒナギクの隣へ。

「……。ヴァンさんとレインさん、大丈夫かな……?」

ヒナギクが心配そうに呟いていた。

「ヴァンの方は少し心配だけど、レインは大丈夫だと思うよ。し
っかりしてるからっ」

「何事もなければ、いいんですけど……」

二人の心配をしながら、ヒナギク達は飛空艇がやってくるのを待
っていた。

鉾山区 前

バストウーク鉾山区。鉾山区と称される名の通り、『ツエールン鉾山』へ隣接している。そして、その鉾山で働く数多くのガル力達の居住区でもあった。

そして、今一番危険な場所でもあった……。

皆と別れて、少し『コウモリのねぐら』で立ち止まっていたヴァンとレインは、移動を始めた。

「そういえばさ、バストウークって場所によって全然印象が違うんだね」

「あー、そうかもしれないな。特に鉾山区なんて、その最たるものかも」

商業区や港は、政治や商売の中心地として様々な人が行き来しているが、鉾山区は本当にガル力の居住区としての機能しかない。だから、他の地区を見たあとに来ると、何も無いように、そして寂れているように思えてしまうのも、無理はなかった。

「そういえば、ウインダスはどうなんだ？ 俺は行ったことないからわからないんだけど」

「うーん。基本、どこも樹が生い茂ってて水が流れてる……かなあ。全体的に橋とかも木で作られててさ。すごいのんびりした雰囲気だよ」

「へえー。じゃあ、バストウークとは全然印象が違うんだな……」
「そうだね。今度、機会があったら訪ねてきてよ。案内するからさ」

「ああ。楽しみにしてる」

『コウモリのねぐら』から続く道を下へ下りて行くと、ガル力達の居住区へと繋がっている。

そんな、ここに住んでいるガル力達以外、あまり人がやってこない、そんな場所に。

あまりにも場違いな声がした。

「あ、あの……。どうか、されました？」

消えてしまうほど、か細い少女の声が聞こえた。

「ああ？　どうかしたか、だと？」

「お前、この状況わかってねえのかよ」

数人のガルカに囲まれて、座り込んでしまっている少女は、背中まである長い髪を地面に垂らしながら、俯いていた。

「全くだぜ。なに俺達の住んでるところにふらっと入ってきてるんだ？」

「ただでさえ、最近、仕事仲間が行方不明になっていって、イライラしてるっていうのに。ヒュームの顔なんて見たくもないな。俺はヒューム族が嫌いなんだよっ！」

「そんな時にここに来るってことは……。だ……。まあ、何されても文句は言えないよなあ？」

その言葉に不穏な空気を感じ取ったのか、少女は小さく息を呑んだ。

「……。っ！　えと、一応、お尋ねしますが、この後、私、どうなるんでしょう？」

「さあな？　知らないほうが身の為……。かもしれないぜ？」

リーダー格の男がそう言うのと周りにいたガルカ達が声を揃えて笑い出した。

「……………」

「くつくつ……。諦めたか。まあ、こんな所に迷いこんだ、自分を呪うんだな……………」

少女が口を紡ぐと、周りにいたガルカ達が一步、彼女へ近づいた。

鉦山区 後

その時、

「お前らさ、そんなことやってて恥ずかしくないのかよ？ ヒュームの俺がこんなこと言っても説得力が無いかも知れないけど、お前らがそんなことやってるからいつまでもヒュームとガルカの溝が埋まらないんじゃないのか？ ったく……俺達ヒュームも悪い所あるけど、そつちも譲歩しねえと意味ないだろうが……」

「っ！？ 誰だ！」

「お前らが嫌いな、ヒューム族の通りすがりの冒険者だけど？ それがどうかしたか？」

そう言い放ったのは、今にも殴りかかりそうな形相でガル力達を睨みつけるヴァンだった。

「はあ……。やっぱりこうなるんだ。ヴァンと居ると。まあ、さすがに今回は俺も結構頭にきてるけどね……っ」

ヴァンの後ろでは、そんなヴァンの行動に溜息を吐きつつ、ガル力達を鋭い目つきで射抜くレインがいた。

「冒険者様かよ。オマエら。オレたち、これからイイとこなんだ。邪魔しないでくれるかなあ？」

「んなもん、お前らだけだろ？ そいつ、めっちゃ怖がつてるじやねえか」

少女を指差しながら、ガル力達に向かってヴァンが言った。

「なんだよ？ せっかく気分良かったのに。オマエらの所為で台無しになっちまった」

「責任、取ってもらわないと……なあ？」

「そうだよな。楽しみは後に取って置くって事か。まずは、オマエらをやってから、だな」

そう言うと、ガル力達はヴァンに向かって歩き出した。

さすがに冒険者といえど、鉱山夫の男　ガル力　複数を相手にするのは無謀と言えた。

「はあ……。お前ら、性根しょうねから腐ってやがるのか。俺は、お前らみたいなのが一番嫌いなんだ。抵抗出来ないやつを複数でやりたい放題やってる奴がなっ！」

ヴァンが声を荒げていた。だが、ガル力達は足を止めようとはしない。しかし、少女を囲んでいた輪が少しずつ崩れていた。だから、

「おいっ、そこで座り込んでる奴っ、こっち向かって走ってこいっ！」

「ふえ？　え？　ええっ？　えと……」

急に声をかけられてびっくりしたのか、少女はおろおろしていた。

「ったく！　早く走ってこいっ！」

「あ、はいっ！　わかりましたっ」

そう言うと、少女は立ち上がって、ガル力達の間を走りぬけていた。

「なっ！　おい、待ちやがれっ！」

「くそっ！　あいつ、ナメたマネしやがって！」

ヴァンが少女を逃がそうとしている事に気づいたガル力達は、彼女を追って走り出した。

「お前、結構速いじゃん。レイン、このまま逃げ切るつもりだけど、構わないよな？」

「うん。体力には自信あるから、大丈夫」

「よっしゃ。じゃ、行くぞっ！」

「え？　えーっ……。って、きゃっ！」

ヴァンは少女の手を掴んでレインと共に走り出す。

「待てっ！　おい、テメェら！　待てっって言ってるだろっ！」

そう、背後から叫ぶガル力達の声聞きながら。

「…………ふう…………。この辺まで来れば大丈夫、か？」

ヴァン達はガル力達の居住区を走り抜けて、鉱山区にある競売所の傍までやってきていた。

「そう、だね。さすがに、こんな人が多い所までは追ってこないと思うよ」

バストワーク鉱山区にも、競売所が存在するので他の地区には劣る人が多かった。

「…………。はあ、はあ…………。はあ…………。…………」
ヴァンにずっと手を握られっぱなしだった少女は今にも倒れそうだった。

「ちよつと速く走りすぎたか。少し休憩しよう」

「そうだね。そのほうがいいかも」

そう言ってヴァン達は競売所へと続く階段に腰をおろした。

「…………。ふう…………」

「どうだ？ 少しは落ち着いたか？」

「…………。はい。なんとか…………。その…………。ありがとついでにました」

ここまで走ってきて疲れたのと、さっきの事がよほどショックだったのだろう。とても小さい声で呟いていた。

「いや、いいよ。そんな気にしなくて。そういえば、あんた、名前は？」

「あ、えっと、リフィアっていいます」

少しずつ気持ちが落ち着いてきたのか、声に元気が戻ってきてい

た。

リフィアは、長い髪がすぐ目を惹く少女だった。言葉遣いもそうだが、少し内気なところがあるのか、目尻が少し下がってる様に見えるのも特徴的だった。

「ん。リフィアか。俺はヴァンデスデルカ。ヴァンって呼んでくれ」

「っと。で、俺がレイン。俺はバストワーク出身じゃないんだけどね。今は訳あって、ヴァン達と一緒に行動してるんだ」

「あ、そうなんですか。よろしくお願いします」
そう言つとリフィアは座つたまま頭を下げていた。

「それはそうと……。リフィ、どうしてあんな危ないところにいたんだ？ 今は危険だってこと、知ってただろ？」

「……えと、リフィって私のこと？」

「ん、ああ。こっちのほう呼びやすいかと思って。イヤなら辞めるけど？」

ヴァンがそういうと、リフィアが頭をふるふると振って言った。

「イヤなんかじゃない、ですよ」

「そっか。なら、リフィって呼ぶよ。で、話を戻すけど、どうしてあんなところにいたんだ？」

「そうだよ。今、ヒュームとガルカって仲が悪くなってるんでしょ？」

レインがそう言及してくる。

「えっと……。ヒュームとガルカが仲悪いのって、前々からなんじゃ……？」

「まあ、そうなんだけど。最近はそれに拍車がかかって、更に悪化してるんだってさ」

リフィアの横に座るレインが言った。

「そうなの？ 私、今日こっちに帰ってきたばかりだったから……」

……

「こつちに……？ えつと、ガルカの鉱山夫達が次々と行方不明になってるらしいんだ。それが原因で対立がひどくなっているらしい。何か情報を知ってる奴がいらないかと思つて、俺達はあそこにいたんだけどな」

ヴァンがそう説明していた。

「あ、そうだったんだ……。私、召喚獣と契約を終えて、戻ってきた所だったんだけど……。迷っちゃって……。で、気が付いたらあんなところにいて。それで……」

さっきのことを思い出したのか、リフィアの表情が暗くなつていった。

「ん？ 今、召喚獣つて言ったか？ もしかして、リフィつて『召喚士』なのかつ！」

「え、つと、そう、だけど……？」

「そうなのかつ！ すごいな。なんか、今日だけで色んな奴と出会つてる気がする」

なんかすごく賢くなったかもつ！ と、ヴァンが一人で喜んでいた。「なるほどね。タイタンと契約を終えて、迷つて歩いていたら、ガルカ達に絡まれた、と」

レインが冷静に分析していた。

「えと、そういう、ことです」

「ほら、ヴァン。一人で浮かれてないで！ そろそろ、日が暮れるよ？ 一旦、皆と合流しないと」

「つと、そうだった。リフィ、行く所あるのか？」

「……え？ ううん。無い、けど……？」

「だったら、俺達んとこ来るか？ きつと、皆も歓迎してくれると思うし」

「ええっ！ えと、いいのかな？ 迷惑とかじゃ……」

リフィアは少し戸惑い気味で聞き返していた。

「あははっ。大丈夫だよ。皆いい人達だからさ」

レインがダメ押しでそう答えていた。

「そう、なの？　じゃあ、甘えちゃおうかなっ
そんな風にして、更に新しい仲間が増えていた。」

鉦山区 後（後書き）

遅くなりました……。最近、結構忙しかったりします。

頻度はばらばらですが、お付き合いいただけたら嬉しいです。

仲間

あと少しで完全に日が暮れて辺りが夕闇に染まる、そんな頃。

バストワーク鉱山区の『コウモリのねぐら』。解散した時は六人だった人数が、合流してみると八人になっている……。そんなことを誰が予想出来ただろうか。

「……………」

「……………あれ？」

「え、つとさ。ヴァン」

ヒナギクやサク、普段ヴァンに対しては強気のユウジも、少し戸惑っている様だった。

「あはは……。ホント、ヴァンと居ると退屈しないよね……………」

ヴァンの後ろでレインが罰が悪そうに立っていた。

「うん？ なんだよ？ というか、お前の隣にいる奴、誰なんだよ。人に揉め事起こさず帰って来いとか言いながら……………」

ヴァンはシヨウキを指差しながらユウジを問い詰めていた。

「つ……………。でも、俺達の方は、今回の事件に関して重要な情報源だと思っよ？ な、ユリ？」

「うん。何しろ、ミスリル銃士隊から直接任務を受けた人ミッションを連れてきたんだからっ！」

ユリが自慢気に言い放っていた。

「ミスリル銃士隊だって！？ ……………つて、アレ？ なんだっけ？」

初めこそ驚いていたものの、聞いたことがない単語に理解が追いついていないヴァンだった。

「……………いやいやいや……。ヴァンもバストワークの国民なら知ってて当然なんじゃないのか？」

「あはは……。まあ、ヴァンさんですからね……………」

「そーよね。ヴァンだもん」

ヒナギクとユリがもう慣れた、という風にツッコミをいれていた。ウィンダス国民のレインとサク、そして何故か知らなかったヴァンにミスリル銃士隊の説明をし終わった後、シヨウキが名乗っていた。

「えと、今回一緒に行動することになったシヨウキです。よろしくね」

「ああ。こちらこそ」

ヴァンを始め、他のメンバーもシヨウキを歓迎していた。

「さて、シヨウキさんのことは一先ず置いておいて……」

ユウジがそう言いながらリフィアの方に目を向ける。

「ひう……。えっと、何でしょうか？」

元々人と話すのが苦手なのか、リフィアはユウジの視線にたじろいでいた。

「おいおい、ユウジ。怖がらせてどうするんだよ。まったく……」

「え？ いや、俺はそんなつもり全然無かったんだけど……」

ユウジがヴァンに責められて戸惑っていた。

「うーん。どうもヴァン以外の人にはまだ馴染めてないみたいだよ」

俺もそうだったし……とレインが呟いていた。

「あははっ。レイン、嫌われてるんじゃない？」

サクが横から口を挟んでいた。

「へえ〜。ヴァンにだけ……ねえ？」

「あらら……。ユリが面白い事見つけたような顔してるよ。ほんとに、もう」

ユリが意地悪そうに目を細めて、その横でヒナギクが苦笑していた。「え、っと。じゃあ、どうしようかな……。んー。とりあえず、自己紹介だけしてくれるかな？ 別にキミのことを邪険に扱ったりしないから」

ユウジにそう言われてようやくリフィアが口を開いていた。

「…………。あ、はい。えっと、リファイアって言います。ついさつき召喚獣と契約を終えて、帰ってきたんですけど、そこでちょっとトラブルに巻き込まれてですね…………。で、そこをヴァンさんに助けてもらったんですけど……………」

と、リファイアがそこまで説明した時、シヨウキを除く、ユウジ達、他のメンバーが一斉に叫んだ。

『え…………？…………！！…………ちよつと待って！…………ヴァンに助けてもらったって！？』

見事なまでに全員八モっていた…………。

「ひうつ！…………えと、私、何か悪いこと言ったでしょうか…………？」

あまりの出来事に皆の声が大きすぎたのが、リファイアがすくみ上がっていた。

「あ、ごめんね。あまりの事について…………。でも、ヴァンが助けてってホントなの？」

ユリがまさかという顔でリファイアに聞いていた。

「本当ですよ？ ヴァンさんが居なかったら今頃どうなってたか……………」

「へえ…………？」

「ちよつ、ユリ！ 俺だって困ってる奴が居たら助けるって！」

「はいはい。分かったから。ヴァンはちよつと黙っててね……。で、どうなの？ レイン」

ユリに対してヴァンが叫んでいたが、信用できない様子でレインに聞いていた。

「ちつ…………（なんで、俺のことは信じないのに、レインやユウジばかり…………）…………ぶつぶつ……………」

「あはは…………。そうだよ。本当のこと。リファイアがガル力達に絡まれててさ。ヴァン、俺が止めるのも聞かずに走り出すんだから……………」

…。まあ、でも、さすがに今回のことは、俺もほっとけなかったかな……」

そう、ユリ達に返していた。

「ふうん？ なるほどねえ……」

「レインがそう言うなら本当なんだろうねー」

ユリが言うと、ユウジやヒナギクが頷き返していた。

「いや、だから、何でレインの言うことなら信じるんだよっ！」

ヴァンの叫ぶ声は風に乗ってかき消された……。

任務

「とりあえず、新しい二人の紹介も終わったことだから、これからどうするか決めたいんだけど、いいかな？」

レインが皆に確認していた。

「そうですね。そろそろ動かないとダメでしょうし……。うーん。じゃあ、シヨウキさん、ミスリル銃士隊から受けた任務を説明してもらっても構わないですか？」

「いいよ。初めからそのつもりだったしね」

そう言いながらシヨウキが席から立ち上がった。

「ミスリル銃士隊からの任務なら、詳細を話してもらってるはず……。だよね」

少し不安げな顔をしながら、ユリがシヨウキに聞いていた。

「うん。大丈夫だと思うよ。ただ、上層部もあまり詳しいことまでは分かかっていないみたいだけど……」

「ええ。それで構いませんよ。今よりも少しでも情報が集まれば、進展すると思いますし」

レインがそう言うと、シヨウキは頷いて任務について話した。

「えつとね。まず、数日前から鉱山夫達が行方不明になっている。それもガルカの人達ばかり。今のところ、誰一人戻ってきた人は居ないみたい。人が急に居なくなるだけでも異常事態なのに、故意としか思えないくらい、ガルカだけを狙っている。ただでさえ、二種族間の仲が悪いバストウークだ。だから、このままだと……。本当にどうなるか、予想が付かないみたいなんだ」

ガルカ達が行方不明になっていることは、少しながら知っていた。だが、実際に任務を受けたシヨウキの口から今の現状を聞くと、現

実味を帯びてきていた。

「やっぱりガルカだけを狙っているんだ……。一体、どういうことよ……」

「確かに妙だね。鉦山夫はガルカが多いけど、ヒュームも居ない訳じゃない……。誰かが何かのために集めているとしか、考えられないよね」

ユリ、ユウジの二人が深刻そうな顔でそう呟いていた。

「目的……？ 何だっけ言うんだよ」

ユウジの呟きにヴァンが疑問を返していた。

「そんなこと、分かれば、誰だっけ苦労しないだろ。それに、分かってたらもう、解決に向けて政府が動いててもいいんじゃないか？」

「そうだね。バストワーク政府が静観を選んでいる……ということは、まだ詳しいことは何一つ分かっていないってことだろうしね」
レインがユウジの後を継ぐように話していた。

「……。そうだよな」

ユウジとレインに反論されたヴァンが押し黙っていた。

「うーんと……。ガルカ達だけを攫さらって出来ることって……。何かあるかなあ〜」

普段はピンと上を向いている耳をたらんと垂らして、しかめっ面をしながらサクが唸っていた。

「普通に考えれば、ヒュームとガルカの仲を今以上に悪くすること……。そして、最終的にはバストワーク共和国の……崩壊……？」

ヒナギクが少し、俯きながらそんな結論を出していた。

その横では、崩壊という単語に驚いたのか、リフィアが息を呑んでいた。

「そうだね。考えたくはないけど、それが一番、可能性があるかな。アイアンイーターもどうやら同じ考えみただよ。今までは一部の友好的だった両種族の人達も、今回のことで少しずつだけ、険悪になっただけだし……。だから、一刻も早く解決しないと

いけないんだよ……」
シヨウキがそう言って締めくくった。

判明……？

始めはレイン達の手伝いとして名乗りをあげた、ヴァン達だったが、知らない間にバストワーク共和国の崩壊の命運を握る大事件へと巻き込まれていたのだった……。

その事実にはユウジやユリ、ヒナギク達は不安な顔をしていたが、只一人、ヴァンだけはいつもと変わらない調子で答えていた。

「結局、そのガル力達を捕まえている奴を見つけ出してくれればいいだけだろ？ 簡単なことじゃないか」

「まあね。一応、その犯人達が潜伏しているらしい……という場所も検討はついてるみたいだし……」

ヴァンの言ったことに対して、シヨウキは苦笑だったが、否定はしなかった。

「ちよつと待つて。潜伏してる場所がわかってるの！？」

ユリが立ち上がったってシヨウキに問い詰めていた。

「っ。落ち着いて？ うん、真偽のほどは分からないけど、目星はついてるみたい。ただ、その情報が正しいかどうか分からないから、軍隊も動いてない……ってことみたい」

「何よそれっ！ 嘘かもしれないけど、分かっているなら乗り込むのが軍隊ってものじゃないの？ こんなときに動かないなんて、何の為の軍隊よ！」

「まあまあ、ユリ。少し落ち着きなさいよ。話が前に進まないでしょ？」

ヒナギクにそう言われてユリが我に返ったように大人しくなり、ごめん、と謝ってイスに座りなおした。

「で、シヨウキさん。その潜伏場所せんぷくってどこなんです……？」

一度中断してしまった話を進めるために、ユウジが聞いていた。

「うん。バストワーク政府が、目星をつけている場所は二つ。一つはパルプロ鉱山……そしてもう一つは……グスゲン鉱山……だ

よ」

シヨウキがそう場所を告げた時、レインとサクの二人以外。つまり、バストウーク共和国出身のメンバーが驚いた顔した。

「よりにもよって……」

「でも、確かにあそこなら隠れやすい……のかもされないよ？」

「そうかもしれないけど、今は獣人の巣窟そくくつになってますよね？」

「ああ。俺やユウジも親によく聞かされてたよ。あの、鉱山の話」

「うう……。うん。私もよく言われてた。絶対に近寄っちゃダメだつて……」

ヴァン達が呟く中、レインやサクが不思議そうな顔をしていた。

「ん？ そんなに危険な場所なのかな？」

「ああ……。そっか。ウインダス出身の二人は、分からないよな。えつと……」

ヴァンがそう言つてそれぞれの鉱山について、説明した。

『パルプロ鉱山』　グスタベルグ地方の北東にある鉱山で、まだバストウーク共和国が建国当初、クウダフ族の居住だった。だが、そこで希少なミスリル鉱が発見されたことにより、バストウーク共和国は軍隊を送り込んでクウダフ族を殲滅せんめつ。鉱山に作り変えてしまつた。そして、世界随一の鉱山へと発展したが、クウダフ族が部隊を送り、奪還していた。結果、人の手が加えられた鉱山跡を残しつつも、今現在はクウダフ達の根拠地と化していた……。

そして、『グスゲン鉱山』。こちらは『パルプロ鉱山』が発見以前に利用されていた、ミスリル鉱の採掘地で、かなりの年月の間利用されていた為、トロツコなどの整備もされていたが採掘量が著しく減少したので現在は廃鉱となつていた。

思案？

「大まかに言うところな感じかな？」

話し終えたヴァンが息をついていた。

「うん、そうね。でも、ヴァンがちゃんと説明しているのを見ると、すごい違和感があるよね……？」

「まあ、そうですね……。ヴァンさんにも出来るんだなーって思っちゃいました」

「……ヴァンさんは、皆さんが思っているよりしっかりしてると思えますよっ！」

ユリとヒナギクが妙な感心する一方で、リフィアがヴァンをフォロウしていた。

「お前らなあ……」

茶化すなよ……とヴァンがぼやいていた。

「あはは……。話を聞く分にはやっかいそうだね。でも、パルプ口鉱山が獣人の根城になっているのは分かるんだけど、どうしてグスゲン鉱山が危険なの？」

ヴァンから話を聞き終えたレインが質問していた。

「それはですね。廃鉱となっているグスゲン鉱山が、アンデット（不死なる者）モンスターの巣窟そくになっているから、ですよ」

今度はヴァンではなく、ユウジがレインへ答えていた。

「アンデット……。なるほど、そういうことが」

「確かにあいつらはやっかいだもんねえ」

ユウジの言葉を聞いたレインとサクは納得がいったと言う風に頷いていた。

アンデットとは、ヴァナ・ディールに存在する数あるモンスターの中でも、特異な存在だった。この世界に何かしらの未練を残して

いる為、成仏できない者達がいる。そんな者達が死してなお活動を続けている……。それがアンデット族だった。

「グスゲン鉱山には、事故で亡くなった鉱山夫達の亡霊が未だに残ってる。だからこそ、誰も近づこうなんて思わないんだよ」

ユウジがそう締めくくっていた。

「やつぱり、亡霊さんがいるんですね……。……」

リフィアがユウジの話を聞いて、すくみあがっていた。

「まあ、怖いよな。そりゃ。大丈夫だって。リフィのことは、俺達がちゃんと守るからさ」

「うん……」

リフィアを元気付けようと言った一言だったが、ユリが聞き逃さなかった。

「……へえ？ 俺が守る……。ねえ？」

「俺、とは言って無いだろ！？」

「うう……。ヴァンさん、私のこと守ってくれないんですか？」

リフィアが泣きそうな顔でヴァンのことを見ていた。

「え……。？ いや。お前のことはちゃんと守るってば」

「ほぐら？ やつぱり、ヴァンが守るんじゃない」

ユリが始終ニヤニヤしていた。

「だからっ！ 俺を含めた皆でっ！ って」

「……。あのっ。私はヴァンさんだけでも十分ですよ？」

リフィアがそう言ってしまった、更にユリが調子づいていた。

「あらあら。仲が良くてうらやましいわねえ」

「だーっ！ 俺はどうすればいいんだよっ！ ああ、もう分かつたよ。リフィのことは俺が守るから！ それでいいんだろ？」

ヴァンが一人、頭を抱えて叫ぶ。そして、最終的には半ば諦めた

かのようにそう、言い放っていた。

「はいっ！ 頼りにしてますよ？ ヴァンさんっ！」

ヴァンに言われたのがそんなに嬉しかったのか、笑顔でリフィア

が答えていた。

「ふふふ……。面白いもの、見つけた……。ふふふ。」

ユリがニヤニヤしながらも誰にも聞こえないくらいの小さな声で呟いていた。

「あーあ。こうなったらユリは止まらないのに……。私、知らないからね」

ヒナギクが小さく溜息を吐いていた。

そんな横であくまで真面目にユウジ、レイン、シヨウキの三人がこの後のことについて話を進めていた。

決定

「あはは。ヴァン達はこんな時でもああやって盛り上げられるんだね。……さて、問題はその二つの鉱山のうち、どちらに潜伏せんぷくしているか、ってことだよな？」

「そうですね……。政府の方もそこまでは掴んでいないようですよ……」

「さすがに今回は別行動にする……。……って訳にもいきませんよ。皆、情報が微妙なことで、決めかねていた。」

「うーん。でも、いつまでもこうやって動かないでいることの方がダメなんじゃない？ だから、分かんなくても、実際に行ってみればいいんだよ」

ヴァンを散々からかって満足したのか、ユリが話合いに参加して前向きなことを言う。が、

「そうかもしれないけど、場所が場所だけに……。ね。さすがに慎重にもなるよ」

「もっつ！ ユウジはいつもそんなことばかりだよな！。慎重になるのもいいけど、行動しないと何も始まらないんだよ？」

「分かってるけど……」

自分の意見を否定されたユリがユウジに説教していた。

「ホント、ユリって前向きなんだよね。こういうときにはそういう性格が助かるけど」

そんな二人の横で付き合いが長いヒナギクが苦笑していた。

「危険かもしれないけど、確かにユリの言う通りだと思うよ。もし、片方がハズレならもう片方にも行けばいいだけのことじゃないかな？」

「そうだよ。これだけの人数がいるんだもん。なんとかかなるんじゃないかな？」

レインとサクがユウジに向かって提案していた。

「……………そう、か。ここで話し合いだけにしても何も解決はしないですよ。じゃあ、とりあえず、どっちから行くか、決めましようか」

鉱山へ行くことに後ろ向きだったユウジだったが、皆の後押しもあってか、仕方なしに考えを曲げていた。

「グスゲン鉱山より、パルプロ鉱山のが可能性ありそうじゃないか？ クウダフの根城になっているとしても、グスゲン鉱山よりはマシな気がするけど……………」

それに、バストワークからも近いし……………と、ユリの攻撃から復活したヴァンが呟く。

「うん……………。私もそう、思うかな」

ヴァンのその意見にリフィアも賛成していた。

「ホント、リフィアってヴァンのことになると、変わるね……………。と、どっちが危ないか……………を考えたらやっぱりグスゲン鉱山だよ。ね……………」

「そうだね。先に行くとしたら、パルプロ鉱山の方がいいかもね」
ユリやヒナギクもパルプロ鉱山の方が良いらしかった。

「……………。みんな、行く気満々なんだね……………。シヨウキさん、先にパルプロ鉱山へ行くってことでいいですか？」

危険な場所と分かっていて、自ら行こうとしているヴァン達に苦笑しつつも、ユウジはシヨウキに確認を取っていた。

「うん。僕の方はそれでいいよ。パルプロ鉱山の方に居てくれると手がかからなくていいんだけどね……………」

「レインさん達も構わないですか？」

「そうだね。俺達はバストワーク周辺のことは分からないから、君達に任せるよ」

「うんっ。頼りにしてるからねー？ みんなっ！」

シヨウキ、レイン、サクの三人も行かないという選択肢は無い様だった。

「じゃあ、先にパルブ口鉱山に向かうってことで。色々準備もあると思うから、出発は明日のお昼前でいいかな？ とりあえず、商業区の入りに集合ってことで」

『ああ』

『はい！』

それぞれの反応でユウジに返事をしていた。

ヴァンとユウジの冒険が始まってまだ一日しか経っていない。それなのに、いつの間にかバ

ストウクの存亡をかけた事件へと立ち向かうことになっていた……。

ヴァンとユウジとリフィア

鉦山区にある、『コウモリのねぐら』から明日の準備をするため、各々別れて行った。

と、言っても幼馴染であるヴァンとユウジが向かう所は同じだし、ヴァンにくつつく様にしてリフィアもやってきていた。ユリとヒナギクは二人で思うところがあるのだろうし、ショウキは一人で行動したいと言っていた。レインとサクに至っては、ウインダスからバストウークまでの冒険の延長のようなモノだから、あまり準備する必要が無かった。

「なんか、改めて思い返してみると、えらいことに首を突っ込んだ気がする……」

「……。今更、そんなこと言わなくても俺やユリ達だって分かってるって」

ヴァンがここに至って事の重大さに気が付いていた。

「でもですよっ！ ヴァンさん達があの時鉦山区に来ていなければ、今頃私どうなっていたかわからないですよ？ だから、良かったんですよ！」

リフィアがそれなりのフォローをいれていたが……結果的には良かったのかもしれないが、ヴァンの気は晴れなかった。

「うん。まあ、リフィアを助けることが出来たのは良かったんだけどな。ちよつと荷が重いつていうか。だからって投げ出すつもりは無いです」

「だね……。ヴァンの言ってること、すごい分かるよ。まさかこんなに大事になるなんて、予想してなかったし……」

「私、どこまで皆さんのお役にたてるかわからないですけど、精一杯頑張りますっ！ ヴァンさんのために」

「……。うん、そっか。そうだよな。あくまでヴァンの為、なんだね？」

「え？ あ、いえ、もちろん、皆さんも含めてですよ？」

「そう？ まあ、いいんだけどさ」

ユウジが少し苦笑しながらリフィアにつっこむ。

「そういえばさ、俺達どこに向かってるんだ？」

ユウジはどうか分らないが、少なくともヴァンとリフィアはどこに向かって歩いているのか、検討がついていなかった。

「どこ……って、明日からの準備だろ？」

「いや、まあ、そうなんだろうけど。準備はたつて、そんなにすることあるのか？」

「俺はあるよ。ヴァン達、何もなければもう休んでもいいんじゃない？ 明日からは結構大変な旅になりそうだし」

まだ冒険を始めて間もないヴァンは装備を整えようにも、着る事の出来る防具が少なかった。だから、他の皆と違って、準備にはその時間がかからなかった。

「そうだな……。リフィ、どうする？」

「んー。私、このままでも全然問題無い、かな」

「さつき帰ってきたって言ったもんな。んじゃ、俺達、先に戻って休んでるわ。また明日な」

「明日から頑張りましょうねっ。ユウジさん！」

そう言つとヴァンとリフィアはユウジに背を向けてモグハウスの方へ歩いていった。

「つたく、準備って言つても、装備を整えることだけじゃないってのに……」

そんなユウジの呟きを聞く者は誰もいなかった。

そしてユウジはヴァン達が歩いて行ったのとは逆の、港に向かつて歩いて行った。

ヴァンとユウジとリフィア（後書き）

今日で投稿を始めてから1ヶ月になりました。

こんな拙い文章を読んで下さる方がいるだけですごく嬉しく感じています。

なかなか書く時間が無くて進まないですけど、どうかお付き合いをよろしく願います。

ユリとヒナギク

モグハウス 各国の冒険者にそれぞれ無料で貸し出されているワンルームのマンション。世界各地を旅する、彼らにとっては有難い施設だった。冒険者一人に一部屋。自分の冒険に必要な装備・道具などなど、色々な物を収納すること出来るスペースがある。ただ、お風呂やトイレなどは無く、共同で使うことになっていた。

モグハウス……と呼ばれる一つの理由として、その一つ一つの部屋に一匹ずつのモーグリと呼ばれる生物が住み付いているからだった。モーグリは、何とも形容のし難い生物だった。モグラのような背格好に、小さな羽根が背中が付いていて、地面より少し上を飛んでいる。さらに、何よりも特徴的なのは、話すとき、語尾に必ず「クボ」と言うことだった。これだけ聞けば、ものすごく間抜けに聞こえなくもないが、各国にあるモグハウスから一瞬で荷物を移動させたり、他の冒険者に荷物を送ったり……と、実はかなりのやり手だった。

そして、ヴァナ・ディールにおける獣人と呼ばれる種族に分類されていた。クウダフ族やゴ布林族と同じ括りなのに、どうして冒険者を助けるような事をしているのか……。その理由を明確に知る者は冒険者の中には居ないのだろう。だが、自由人である冒険者にとつて、そんなことを気にしている人間は誰一人としていなかった。

バストワーク共和国、ユリ専用のモグハウス、そこに明日からの準備を終えた、ユリとヒナギクがいた。

「うーん。でも、まさか自分達の国を救うかもしれない……なんて事になるとは思ってなかったわよ」

「そうだね。なんか急に話が大きくなって……。びっくり

しちゃった」

「うん。正直、今のあたしに出来るか不安だけど、話を聞くだけ聞いて、やっぱり出来ませんでした、なんてあたしの性に合わないし……」

「あはは。ユリならそうだろうって思ってるよ。だから、なんとかして解決まで出来たらいいね」

「うん……！ 明日から、頑張ろうっ！」

こうしてユリとヒナギクの夜は更けていく……。

旅立ち……？

ユリとヒナギクがいる場所とはまた別のモグハウス。

「ウインダスを出た時はどうなるかと思っただけど、いい子達と出会えてよかつたね？ レイン」

「ん。そうだな。まあ、始めはこんなことになるとは思ってなかったけど」

「ま〜ね。でも、最初に言い出したのはあたし達なんだし、ね？」

「ああ。ぱつと解決して、ウインダスに帰ろうか」

「うんっ！」

「……でも、ウインダスの政府に今回のこと、何て伝えたらいいんだろう……」

解決に向けて気合いを入れたレインだったが、報告のことを考えると頭が痛いのも事実だった。

「まさかこんな大事になるとは……だもんねえ。どっちにしても、解決しないと意味ないと思うよ？」

「まあ……そうだよな。じゃあ、明日から頑張ろう！」

「そうだねっ！」

ヴァン達と別れたシヨウキは一人、バストワーク港の飛空艇乗り場の傍まで歩いて来ていた。

「最初は一人で行くつもりだったのに。気が付いたらあんなにくさんの仲間が集まってた……。もう、誰かと一緒に旅をするのは嫌ったハズなのに」

誰に話しかけるわけでもなく、シヨウキはただただ一人で呟いていた。

「ん？ シヨウキさんじゃないですか。こんなところまで、どうかしたんですか？」

「っ。あ、ああ。君か……。ただぼーっと歩いていたらここまで来てしまったって感じかな」

「あはは。明日は早いんですから、早く休んだ方がいいんじゃないですか？」

「君の方こそ。何か明日の準備でもしていたのかな？」

「ええ。ヴァン達に任せてはおけないですからね」

「確かに……。そうかもしれないね」

「でしょ？ それじゃあ、俺は先に休ませてもらいますね」

「うん。明日からよろしくね」

シヨウキがそう言うと、ユウジが頷き、モグハウスの方へ歩いて行った。

「……。今度こそ、同じことを繰り返さない為に……。もう誰も傷つかない様に……。僕はナイトになったんだ。だから……」

シヨウキは呟きながら、今日知り合ったばかりの皆の顔を思い出しながら、バストワーク港の道を歩いていった。

次の日、ユウジが決めた待ち合わせ場所。バストワーク共和国商業区。南グスタベルグの入り口付近。あと、数歩歩いて先へ進むともうグスタベルグが見えてくる……。そんな場所。

本来なら八人が集まっていけないといけない、此処に。七人しか集まっていなかった。

「えつと〜。一、二、三……。って、ん？ あれ？ なんか一人足りてないよね？」

ユリが周りを見渡してそんなことを呟いた。

「……。はあ。やっぱりか。あいつは。まあ、予想通りなんだけどね」

溜息を吐きながらユウジが言った。

「ヴァンさん……。遅れてるんですね」

「そうだね。どうかしたのかな？」

「ん〜。時間、ちゃんと伝えてたよね？ 確か」

「うん。そのハズなんだけど……。忘れてる……。なんてことは無いよねえ」

ユウジを除く、他のメンバーが口々に不安の募らせていた。でも、
「皆、大丈夫だよ。ヴァンに何かあったって訳じゃない。あるとしたら、あいつ自身の問題だし。それに、いつもこうだから……。」
と、何度目か分からないため息をユウジが吐き出しながら皆に伝えていた。

「ん〜？ えっと、どういふことなんでしょっ？」

リフィアが首を傾げながらユウジに質問する。

「ん。待ってて。きつと、すぐに分かるよ。」

ユウジはそう言って商業区を中心へと、視線を向けていた。

「………………。ふん。そつか。まあ、そんなことだろうと思ったよ」

かなりの時間の沈黙のあと、素っ気無い返事。ここまでの沈黙だ。かなり怒られると覚悟していたヴァンは少し拍子抜けしてしまっていた。

「…………怒らないのか？」

「ん？ 何言ってるの？」

訳が分からないといった風にユウジが笑った。その後を引き継ぐようにして、リフィアが、

『もう、かなり怒ってるんだよ』

と、満面の笑みでヴァンに言い放った。

その今まで味わった事の無い戦慄にヴァンは何も言い返すことが出来なかった。だから、

「…………。あはは…………。ですよねえ…………」

と、認めるしかなかった。

オシオキ（後書き）

短いんですけど……。すいませんっ！笑

リンクパール

かなり遅れてきたヴァンに、七人それぞれの『おしおき』を終えた後、ユウジが場を纏めるように言った。

「さてつとヴァンも反省したみたいだし。そろそろ渡してもいいかな。というかさヴァン、そろそろ復活してくれるかな？ 話が進まないから」

「……………ああ。そうだよな。でも、そんなに冷たい口調で言わなくてもいいじゃないか。少しくらい優しさを……………」

「……………ふん？ まだ足りないのかな？ なら……………」

「つ！ ごめんつ！ 俺が悪かったからつ！ 反省してますつ！ だから、止めてつ。お願いだからつ！ で？ 何を渡すつて？」
「ついさっきまで執行されていた『おしおき』を思い出してヴァンが必死になって話を戻そうとしていた。

「ん？ あれ？ 『おしおき』はもういいの？ せつかくやる気だったのに……………」

「アレ、楽しいですよ〜」

そんなユウジとヴァンの後ろでユリとリフィアがはしゃいでいた。それを聞いていたヴァンが少しだけ体を震わせたのには誰も気づかなかった。

「ホントに反省してるか？ はあ。まあ、いいか。……………えつと、皆に渡そうと思っていたのはコレなんだ」

ユウジがそう言って背負い袋から取り出したのは薄い緑色をした真珠だった。

「ん？ それって……………リンクパールだよな？」

レインがユウジの手の平の真珠を見つめながら言った。

「ええ。そうです。これから必要になるかも、と思って。昨日の

うちに買っておいたんです」

「準備いいね。さすがだよ。僕はそこまで気が回らなかったな」

「キレイな色だねえ……」

「うん。そうですねー」

「あたし、名前は知ってたけど、使ったことないや。ヒナと二人の時は必要なかったしね」

「そうだね。拠点に侵入することも無かったもんね」

「待て！ 俺を置いて勝手に話を進めないでくれよっ！ っていうか、リンクパールって何っ！ 聞いたことないんだけど」

メンバーのそれぞれが感想を言う中、只一人ヴァンだけが取り残されていた。

「……。やっぱりか。そんなことだろうと思ったよ。ホントに……」

「ホントにね。ヴァンって何にも知らないよね。っていうか、何だったら知ってるのよ」

ユウジの後をユリが上手い具合に引き継いでいた。

「知ってることくらいあるわっ！ 俺だってそこまでバカじゃないっ！ でも、知らないモノは仕方ないだろうっ！」

「あゝあ。よくそんな知識で冒険者になるうって思ったよね。魔法も知らなかったしさ」

「っ……」
「ああ……。俺もまさかそこまでバカだとは思ってなかったよ」

「冒険者になりたいんだったら少しくらい勉強しとけば良かったのにね」

「……」
「全くだよ。俺がどれだけ言っても聞かなかったからなあ……」

「……」
「ホント、バカだよねえ」

「ああ。根っからのバカだよ」

「……何も……そんなに……グスっ……」

「は、はいっ！　そこまで！　それ以上やるとヴァンが泣くからっ！　っていうか、なんかもう涙目だしっ！」

と、話が全く進まないのであわててレインが止めに入っていた。

「えー。面白かったのに……。ねえ、ユウジ？」

「うん。まあね。久しぶりだったから、つい調子に乗りすぎたかな」

ユリはともかく、ユウジは少し反省している様だった。

その横ではヴァンがリファイなぐに慰められていた。

「ヴァンさんっ。知らないことはこれから覚えていけばいいんですっ！　私が知ってることなら何でも教えてあげますからっ」

「……っ。ああ……。ありがとな。リファイ……」

「いいよっ。でね、リンクパールって言うのは」

早速さっそくヴァンの知らないことを一つでも無くそうとリファイが説明を始めていた。

リンクパールというのは、リンクシエルから取れる魔法の真珠である。同じリンクシエルから取れるリンクパールを持っている者同士は声を出さなくても心の中で会話ができるようになる。要するにどんなに離れている場所に居たとしても、心の中で念じれば相手に意思が伝わる、ということだった。

「簡単に、だけどこんなとこかな？　後は実際に使ってみればよくわかると思うよ」

「ありがとな。でも、聞いたただけだとやっぱり分からないよな」

「まあ、ヴァンだからそうだろうね」

と、ユウジが言ってヴァンの手の平にさっきまで持っていたリンクパールを置いた。

「へえ……。持ってみるとそんなに大きくないんだな」

「大きすぎると持ち運ぶのに不便だろ？」

「ん？ 背負い袋の中に入れていたらダメなのか？ そのほうが荷物にならなくていいじゃん」

「リンクパールって言うのは、魔法の道具の一種なんだよ。で、そういう道具は手に持つておくとか、耳飾りにしておくとか、肌身はだみ離はなさず持つておなかいと効果が発揮されないんだ」

だから背負い袋に入れておくと効果がないんだよ、とユウジが説明していた。

「ふ〜ん。なるほどなあ……。結構不便なんだな」

「そうかな？ もし常に考えてることが伝わるんなら、それはそれで大変なことになると思うよ」

「そうなのか？」

「うん。まあ、それは使っていくうちにわかってくるかな」

ユウジはヴァンに言いながらメンバー全員にリンクパールを配っていった。

出発！（前書き）

明けましておめでとございます^^

11月からこちらにお世話になっています。読んでくださっている方々、本当に感謝です。この作品を読んでいただけるなんて思っていなかったので、驚き反面、嬉しさ反面って感じます。

それでは、今年も一年、よろしく願いしますね。

出発！

「コレから先使うことになるかもしれないけど、今は要らないから片付けてもらっていいよ」

レインやサクユリ達はそれぞれの袋へリンクパールをしまいこんでいた。

ふうん。まだ使わないのか。ていうか、使う場面なんてあるのか……？ うーん。というか、今からどこに行くんだっけ……？ 確か、ナント力鉱山？ えーっと……。アレ？

おいおい……。お前が目的地を忘れてどうするんだよ、ヴァン。それくらいは覚えておかないと絶対いつか困るぞ？ というかリンクパールを握ったまま変なこと考えないほうがいいと思うよ。ただでさえバカなのに、考えていることが駄々漏れだから

「うおっ！ なんだ！ 急に頭の中にユウジの声が聞こえたぞ！」
ヴァンは一番遠くにいるハズのユウジの声がすぐ傍で聞こえたので驚いてしまった。

「あはは。二人はまだ片付けてなかったんだね。声に出さなくても考えてることが伝わるでしょ？ 獣人達に気づかれずにやり取りするときには便利なんだよ」

「なるほどな……。でも、慣れるまでには結構かかるかも……」
「初めて使うときは戸惑うかもね」

レインが言うつとヴァンはしかめっ面をしながら自分の袋にリンクパールを入れた。

「ヴァンにリンクパールの説明も終えたとこだし、そろそろ出発しようか」

「うん。そうだねー。そういえばさ、パルプロ鉱山までどれくらいかかるの？」

「えっとね……。正直、俺もまだ行ったことは無い場所だからな

あ……。詳しくはわからないんだよ」

ユリの質問にユウジは困った風に笑って答えていた。

「なんだ。ユウジでも知らないんじゃないか」

「……。うん、知らないのは仕方ないんだけどさ、ヴァンにだけは言われたくない」

「でも、知らないのは事実だろっ？」

「そうだけど。バカに知らない呼ばわりされるのって腹が立つんだよね！」

「あはは。うーん、そうだね。僕も実際に行ったことはあんまり無いから確実なことは言えないけど、そんなに遠くないと思うよ？」

「そっかあ。出来るだけ早く着けたらいいよねっ！」

「そうだね。もし、パルプロ鉱山に捕らわれているのなら、早く見つけてあげないと」

「そういえば、さ」

ヒナギクと話していたユリが何かを思い出したかの様に切り出した。

「ん？ どうかした？」

「最初はパルプロ鉱山から行くんだよね？ だったら、商業区からじゃなくて、港からのほうが早く着くんじゃないの？」

バストウーク共和国には外へと続く出口が三箇所あった。それぞれ鉱山区、商業区、港と、目的地によって使い分けるのが常だった。ユリの言うとおり、パルプロ鉱山へは港から行ったほうがかなりの時間を短縮できるのだった。

「だよなあ。俺もそれは疑問に思ってたんだ。どうしてわざわざ遠回りなんかするんだ？」

「……。まさか、ヴァンがパルプロ鉱山の場所を知っていたなんて……」

「うっさい！ それくらい知ってるわっ！」

「と、そんなことはどうでもいいんだけど……。一刻も早く着かないといけないのはそうなんだけど、ヴァンに少しでも戦闘の経験

……というか、大人数での立ち回りみたいなのを知って欲しかったんだ。パルプロ鉱山でやるより、道中のグスタベルグのほうがいいかなと思ってさ」

それに俺自身もそんなに経験ないしね……とユウジは続けた。

「なるほどねえ。まあ、南グスタベルグから迂回したほうがそういう機会には多く巡り合えそうだもんね」

「そういうこと。ごめんね、みんな。少し遠回りになるかもしれないけど。ヴァンと俺の為だと思って」

ユウジはそう言って両手を合わせて謝っていた。

「ヴァンさんの為、ですか。なら仕方ないですよねっ！」

「ホント、リフィアはヴァンが絡むと……。まあ、いいんじゃないかな？ いきなり格上の相手と戦うよりは」

「そーだねっ。最初は皆初心者なんだもん。大丈夫だよっ！」

リフィアを始めとして、レインやサクも行程が遅れることに対して、なんとも思っていない様だった。

「ありがとう。それじゃあ、早速出発しようか！」

「って、ちょっと待ってっ！俺の話俺抜きで勝手に進めるのはどうかとー！」

今まで黙っていたヴァンが反論していた。

「でも、事実でしょ？ また昨日みたいなことになるかもしれないんだよ？」

「う……。それは……」

昨日のクウダフに襲われたことを思い出したのか、言い返すことが出来ないでいた。

「だから、こういう時にでも経験を積んでおかないと駄目なんだよ」

「それはそうかもしれないけどさ……」

「ほらっ！ ユウジも。そんなところで言い合いしてないで！ 少しくらい歩いたらどう？ ただでさえ遅れるかもしれないのに、

余計に遅くなるよっ！」

少し先を歩いていたユリがユウジに向かって怒鳴っていた。

「ははは……。分かってるよ！。ヴァン、もう諦めるって。前向きに考えろよつ。そろそろ行かないとホントにユリに怒られるから」
「仕方ないな……。行けばいいんだろ!？」

『こつなつたらガンガン強くなってやる—————!』

そう言つてヴァンはグスタベルグへの街道を走り抜けて行つた。

「あはは……。もうヴァンはやる気なんだな。もう同じことは繰り返さない……」

シヨウキが呟きながらパーティの一番後ろを歩いていった。

南グスタベルグ

南グスタベルグへ出て半刻。

あと少し進めば北グスタベルグへ入るうかというところだった。

「そういえばさ、ユウジ」

「ん？ どしたの？ ユリ」

「北グスタベルグって東西に分断されてたよね？」

「うん。今から俺達が行こうとしてるのは、東側だよ」

北グスタベルグは大きな崖によって東西に分断され、通ることが出来ないでいた。もし、東側から西側へ行こうとするならば、一度南グスタベルグを経由しないといけないのだった。

「そっかー。それなら大丈夫。まあ、ユウジのことだから間違えたりはしないだろうけどさっ」

「あはは。二十年前の大戦の時は通れてたみたいだけどね」

「あれ？ そうなの？」

「らしいよ。俺も人から聞いたただだから、わかんないけど」

「ふ〜ん。今もそうだったら便利だったのにねえ……」

ユリが少しだけ残念そうな顔をして呟いた。

「まあ、いいんじゃない？ 今でもそんなに不便って訳でもないしね」

「まあね〜。っていうか、今のところ敵に遭遇しないよね……」

「そうなんだよ。正直、ヴァン一人でも勝てるような奴らばかりだよな」

ユウジ達が今いる場所は南グスタベルグのちょうど真ん中辺りだった。この辺りにも敵はいるのだが、獣人達や魔物は自分よりも格上の相手に対しては襲ってこない。自分と相手の力量を正確に把握することが出来るのだった。

もう少し西へ進めば手ごわい相手がいるのだが、それこそ遠回りになっってしまう。

「うん。やっぱり港から行ったほうが良かったのかなあ」
「まあ、いいじゃないですか。いざとなったら獣人を相手に……」
ユリとユウジが話していると後ろからヒナギクも会話に加わって
きていた。

「そうだねー。クウダフやゴブリンなら結構強いからねえ」

「つて、ヴァン！ そっち行ったらダメだつて！」

「ん？ そうなのか？ でも、北グスタベルグつてこっちだろ？」

「そっちは西側！ パルプロ鉱山へは東側からしか行けないから
っ！」

ユウジは周りの人間が驚くほどの大声で叫んでいた……が、

「?? ん？ 言ってることがよく分からないんだけど」

「……はあ。もう、いいから黙ってついて来い……」

ヴァンには全く伝わっていなかった。

ヴァンは納得のいかない顔をしながらもユウジ達の方へと戻って
きていた。

「あはは……」

「まさかバストワーク出身で知らない奴がいるなんてね……」

ヒナギクとユリも余りもバカっぷりに乾いた笑いしか零せないで
いた。

そんな三人を尻目に、ヴァンとその後ろにいるリフィアは、

「ヴァンさん、こっちですよっ！」

「そうなのか？ 北グスタベルグつて向こうだろ？」

「さつきユウジさんが言ってたじゃないですか！」

「ん〜。イマイチわからないんだよなあ」

「じゃ、じゃあ、私の後ろをついて来ててくださいよっ」

「そうだねあ。ユウジよりリフィアのほうが良い気がするし」

「あはは。それじゃ、行きましようか！」

「そうだな」

二人仲良く先へ進んでいった。

「……………」

「……………」

「……はあ。あはは……」

「なんだろう。ヴァンのあの態度見ると無性に腹が立つな……」
「……それって、リフィアみたいな子の方がユウジは好みってこと？」

「は？ いやいや、そういう意味じゃなくて……」

急にそんなことを言い出したユリにユウジは焦っていた。

「じゃあ、どういう意味なのよっ」

「というか、そもそもユリがなんで怒ってるのかわからないんだけど……」

「別にいいじゃないっ！ で？ どうなのっ？」

「あらら……。ユリってば、ムキになってるよ……」

「え、っと……。単にヴァンが慕われてるのが気に食わないだけだからさ」

「ふん。ホントにそれだけ、かな？」

「それだけだって！」

「……なら、いいけどさっ」

「……………」

ヴァン達の後ろで妙な空気になっていた。

「なんだか、ヴァンとリフィアちゃん、仲良いねえ。ユウジ達は変な感じっ」

「そりゃな……。あの時、助けてもらったんだから。リフィアがヴァンに懐くのも無理はないさ」

「懐くって……。そんな言い方しなくてもいいんじゃない？」

「あの二人を見てるとそれが正しいかかって思っっ」

「なるほどねえ……」

ユウジ達とは少し離れたところでレインとサクもヴァン達を見ながら話していた。

北グスタベルグ（前書き）

私事で申し訳ないんですが、今週末のセンター試験を筆頭に、試験三昧の日が続きそうです。

出来るだけ更新していくように頑張りますが、ペースはおちると思います。何卒、ご了承ください……っ。

北グスタベルグ

北グスタベルグに入って少し経った頃。

「ユウジ、まだ着かないのか？」

「そうだなあ……。あと二時間くらいじゃないかな？ ちょうど半分くらいだろうし」

「かなあ。ウィングダスの近くにはこんな場所無いから新鮮なんだけどねー。でも、ただ歩いているだけっていうのも暇だよねえ……」

「そうだね〜……」

ヴァンを始め、サクヤリフィアでさえ退屈そうにしていた。

「もう少し我慢だよ。そのうちヴァンがクウダフとかに襲われるだろうし……」

「……へえ……。俺が、ねえ。って、おいっ！」

「かなー。だったら置いていこうねっ」

「え？ 放置？ マジで？」

明るい表情で言うユリにヴァンは本気で驚いていた。

「大丈夫ですよっ、ヴァンさん！ 私がいます！」

「そう、だよな？」

「んー？ リフィアは無理やり連れて行くよ？」

「あ、あれ？ え？ ええー？」

「あはは……。置いてかれるのかあ……。そっかあ〜」

リフィアのおかげで安心してたヴァンだったが、それもすぐに絶望に変わる。

「はいはい。それくらいでいいでしょ。ユリ。まあ、ヴァンが襲われるのはきつと変わりないと思うよ。だから、気を抜かないでね？」

「はーいつ」

「……ヴァンっ。前にクウダフだ、こっちに来るぞ」

「ん。了解！」

北グスタベルグの大きな山が並ぶ所。そこでクウダフがこちらに近づいてきていた。

シヨウキの声にヴァンが大きく返事をする。

「ふう……。やつとかあゝ。暴れるよー！」

「つて！ ユリは白魔道士でしょっ！」

「ぱちん！ とヒナギクがユリの頭を叩いていた。

「痛っ。わかってるよー。だって、退屈だったんだもん！」

「ユリが突っ込んだら危ないだろ？」

「むう……。だから、わかってるつてばー！」

クウジにまで言われてユリは少しむくれていた。

ユリがそんなことを言っているうちにクウダフはもうすぐ目の前まで近づいていた。

「ふむ……。ヤングクウダフみたいだね。アイツならそんなに苦戦しないかな？」

「そうだねえゝ。魔法も使ってこないしねっ。ヴァンと同じ戦士だし」

後ろのほうでレインとサクが話していた。

「でも、油断は駄目だよな」

「うん。そうだねえゝ」

「まあ、今回は俺達の出番はなさそうだし、後ろで見させてもらおうか？」

「うん。危なくならないだろうしねー。みんなもいるしっ」

「ヴァン、いきなり飛び込んだりしないこと。相手の実力が分からないうちは無茶なことはしない。いいね？」

「ああ。分かった」

もう留め具から武器を外しているヴァンにシヨウキが言う。

クウダフは視界にヴァン達を捕らえたのか、一直線に向かってくる。

「よし、こっちに来てる。一応、相手の注意を自分に向けてくれる?」

「了解っ!」

ヴァンが言うと同時に持っていた剣で自分の盾を叩く。

金属同士がぶつかり合う音がして更にクウダフの目がヴァンを捕らえた。

「いい感じだよ。これでユリ達にクウダフの意識が行くことは少なくなったハズ」

『挑発』と呼ばれる戦士やナイト（騎士）が使う技は、一時的に相手の注意を自分に引き付けるといふ、前衛ならではのモノだった。もうあと数歩でヴァンとクウダフが対峙する、そんなタイミングで背後からユリの保護魔法が届く。

「相手も戦士みたいだから、とりあえず プロテス（護り）だけね。補助は任せてっ!」

「ユリったら……。やる気だけはすごいね……」

「ヴァンさんっ。ファイト! ですよ」

後ろの三人がそれぞれ声をかけてくる。

「ヴァン、昨日みたいな油断はもうダメだからね? 今は後ろに皆がいるんだから」

ヴァンの横でユリからの保護魔法を貰ったユウジが言う。

「ああ。分かってるよ。大丈夫だ!」

「! ヴァン、ユウジ。来るよっ!」

多勢

クウダフは自分の剣が届く距離まで来ると、ヴァンに向かって片手剣を振り下ろした。

「そんな攻撃、当たるかよっ！」

ガキイン！ と、剣と盾がぶつかり合う音がした。

ヴァンが左手に持った盾でクウダフの剣を受け止めていた。そのまま力任せに剣を跳ね除ける。クウダフは押し返されたことによつて、後ろへ仰け反る。

「とりあえず、一発喰らっとけっ！」

ヴァンがさつきまでクウダフが立っていたところへ一歩踏み込んでそのままクウダフへ斬りつける。

昨日、ヴァンが斬り付けたときはクウダフの防具によつて阻まれていたが、今回はヴァン自身にも余裕があつた為か、隙を狙つて斬撃を加えていた。

「ゲエ……………」

防具の無い、軟らかいところを斬られ、クウダフから苦悶の声が聞こえた。

「やるじゃん、ヴァン。また弾かれるのかな〜って思ってた」

「…………。うん。さすがに学習しないと〜と思つてさ」

「へえ。そんな風に考えてたなんてねえ。ちゃんと反省してたんだ？」

「二人とも！ 話をするのはいいけど、まずは目の前の相手を倒してからっ！」

シヨウキに厳しく言われ、ヴァンとユウジは視線を元に戻す。

ヴァンに斬りつけられたクウダフだが、たった一撃で沈むのなら苦労はしない。もう、体勢を立て直していた。

「…………戦士つて言つてたよな…………？ じゃあ、昨日みたいなコトは起こらないんだな？」

「うん。大丈夫だよ。純粹に力比べだから」
ヴァンの質問にシヨウキが答える。

「うっし。んじゃ、このまま行きますかっ!」

「了解っ!」

ヴァンとユウジ、補助をするようにユリの白魔法が届く。大したピンチも無く、クウダフは動かなくなっていた。

「ふう……。こんなもんかな?」

「そうだね。相手のことをしつかり分かっているだけで大分違うね」
「全くだ……」

「これからはちゃんと覚えたほうがいいと思うけど……?」

「頑張ってみるよ」

ヴァンとユウジが話していると、後ろからレイン達も合流していた。

「おつかれさまー。さすがに手こずったりはしないよね」

「二人とも、息合ってるねー! さすがだよー!」

レインとサクが笑顔で話しかけてきた。

「まあ、あたしの魔法もあつたしね」

「ユリったら……。でも、昨日とは大違いでしたよっ」

ユリは少し偉そうに、ヒナギクは感心しながらそう言った。

「そりゃ、もちろん! 昨日みたいな失敗はもうないからなっ!」

「おい、ヴァン。そんなこと言っていると足元掬われるぞ?」

「大丈夫だって! 俺だって、少しずつ強くなってる!」

「まあ、そうだろうけど。でも、油断は禁物だよ?」

ヴァンの後ろからシヨウキが声をかけていた。

「……。分かってるよ」

「なら、いいんだけどね」

シヨウキに釘を刺されたヴァンがむすつとしながら答えていた。

「あはは。それにしても、シヨウキさん。ヴァン達に指示を出す

の、上手でしたね。後ろから見ていましたけど、びっくりしましたよ」

「あ、それは私も思いました。シヨウキさんって昔、軍とかに居たんですか？」

「……うん。数年前までね。もう、今は抜けているけど」

レインとヒナギクに聞かれ、シヨウキは少し暗い顔で呟いていた。

「？」

その様子をユウジ達が首を傾げながら見ていた。

パルプロ鉦山前にて (前書き)

1ヶ月ぶりの更新になります。本当に申し訳ありません！ 忘れていた、とかじゃなく、続きが書けなくて……。

とりあえず、入試は終わったんですが、手続きやら他のことで毎日忙しい日々を過ごして下ります。これからもスローペースになるとは思いますが、付きあっていただければ嬉しいです。

パルプロ鉱山前にて

「さあ。ここまで来たら後はもう少しだよ。気を抜かないようにね？」

「分かってるって。それにしても、周りのクウダフとかも寄ってこなくなったな」

「そりゃね。アイツらは自分より強い相手には向かっていかないから」

「へえ……。じゃあ、それだけ俺達が強くなってることかっ！」

「あはは。そうだね。強くなってると思うよ」

「シヨウキさん、あんまりヴァンをおだてないでくださいよ！」

「でも、事実なんだからいいじゃない」

「そうだぞ！ ユウジ。余計なこと言うなよな」

「はあ……。まあ、いいけど」

パルプロ鉱山まであと半刻辺りの所で、突入前の休憩を取っていた。

「あ、でも……」

と、シヨウキが呟く。

「どうしたんです？」

「うん。北グスタベルグではもう襲われる心配は無いと思うけど、パルプロ鉱山に入れば、またクウダフ達に襲われると思うよ？」

「……え？ マジで？」

「あはは。本当だよ。グスタベルグにいるクウダフ達より、ほんの少し強いんだ。だから、気を付けてよ？ それに中はクウダフ達の住みかだしね……」

「そっかあ。もうこの辺りの奴には負けなれないと思ってたのにな」

「ヴァン……。そんな急に強くなる訳ないじゃないか」

「そうだけどさあ……。期待するだろ？」

シヨウキの忠告に少し落ち込みぎみのヴァンだった。

「ねえ、レイン。あたし達いつウィンダスに帰れるのかな？」
サクが少し俯きがちに言った。

「うーん。どうだろう。サクは早く帰りたい？」

「別にそんなコトないんだけどね……。クオン大陸ってなんだか慣れなくて……。過ごしにくいつていうか」

「なるほどな……。まあ、話を持ちかけたのは俺達からだしさ。解解決するまで、我慢！」

「うんっ！ みんなと冒険するのも楽しいしねっ」

「そうだな。たまには大勢で行動するのもいいよな……」

レインは呟つぶきながらユリ達の方へ視線を向けた。

ユリ達の会話（前書き）

半年ぶりです。本当にすいません。まだ生きてます。笑

学校が始まり、新しい環境にあたふたしていたら、夏になっていました……。。

頑張りますので、よろしくお願いしますね^^

ユリ達の会話

レインがこっちを見ているなんて知りもしないユリは、

「ふう……。手伝うって言ったものの、やっぱりしんどいね〜」

だらけきった表情で地面に座り込んでいた……。

「ちょっと！ ユリ！ もうそんなこと言ってるの？」

「だってさあ〜。あたし達が今までしてきたことって、簡単なモノばかりだったじゃない？」

「まあね……。でも、手伝うって言ったんだから、最後までやるんだよ？」

「分かってるわよ〜。大丈夫、大丈夫」

「ホントかなあ……」

「だから、大丈夫だって！ ……と、そういえば、リフィアって召喚士なんだよね？」

不安そうなヒナギクに返事をしてから、ユリはリフィアのほうに向いた。

「ふえ？ え、つと。はいっ。そうですよ？」

まさか自分に話が振られるとは思っていなかったのだろう。声が

裏返っていた。

「あたし、召喚士を見るって初めてなんだよねっ！」

「あ、私も。なかなか居ないからね。」

言いながらヒナギクも会話に入ってくる。

「そうかもしれないですね。少し前までは禁断の魔法でしたし…」

…」

寂しそうな表情でリフィアが呟く。

「禁断の魔法……？」

「はい。二十年前の大戦の時、ウィンドスで呼び出された、召喚獣 フェンリル がいたそうなんです。

劣勢だったウィンドスをたった一体で救ったんですけど……。フェンリルを呼び出した反動で召喚者のカルハバル八つて人が亡くなって……。それ以来、召喚魔法は禁術になったんです」

リフィアは遠くを見つめながら語っていた。

「そっかあ。ん？ でも、どうして冒険者の中に召喚士がいるの？」

「えつとですね……。二十年前の大戦で、召喚魔法は失われたはずなんですけど、最近になって解明されて……。それが冒険者の間で広まったんです」

「ん〜？ じゃあ、危なく無くなったってこと？」

首を傾げながらユリが聞いていた。

「……そういう訳じゃないです。だから、私もしかしたら……
ってことはあるんです」

「なるほどね……。まあ、冒険者って怖いもの知らずなところある
からね」

「あはは……。ユリらしい表現だと思うよ」

快活に話すユリにヒナギクが呆れていた。

「まあ、その原因になったフェンリルって未だ見つかっていない
んですけどね……。今、分かっているのはえっと……火・土・水・
風・氷・雷・光の7つですね」

指を折りながらリフィアが数える。

「……リフィアは使役させることが出来るの？」

「そうですね。一応、フェンリル以外の召喚獣達を呼び出すコト
は出来ますよ」

「ホントにつ？ そうなのっ！ すごいじゃない！」

ユリが興奮しながらリフィアに詰め寄った。

「そうですね？ 他の召喚士の方にお会いしたことが無いので…

…

「これは戦いになった時が楽しみねっ！」

「ちよ、ちよっとユリ。落ち着きなさいって……。バストウークに居たのも、契約の帰りだったんだよね？」

立ち上がったユリを嗜めながらヒナギクが言う。

「そうですね。運の悪いコトにガルカの人達に囲われましたけど

……」

リファイがあはは、と笑いながら続ける。

「そうよね。ほんとに……」

ヒナギキに怒られて元の位置に座りなおしたユリが呟く。

「でも、ヴァンさん達に助けてもらって良かったですっ！」

「あれからリファイ、ヴァンに懐いてるもんねー？」

少し呆れ顔でユリがリファイに向けて言っていた。その横でヒナギクも同じように頷いていた。

「そ、そんなこと！ そんなこと、無いですよ？」

「誰が見ても分かる態度だったのに？ 嘘は良くないよ？」

「え、っとお……。男の人はまだちよっと恐いっていうか……」。

その……。で、でもヴァンさんは特別っていうか……。あの……」

リフィアは自分でもヴァンに対して好意を持っているということ
を自覚しているのか、俯きながら答
えていた。

「ほらあ！ 隠さなくたっていいじゃない？ ねえ、ヒナ？」

「うん。そうだよ。傍で見てもすぐ分かるし……」

「あ、あう……。そんな」

ユリとヒナギクに言われ、だんだんと顔が赤くなっていくリフィア
であった。

「ま、気づいてないのはヴァンだけじゃないかなあ」

「そうね。ヴァンさんって鈍そうだもん」

「そ、うですかね……？」

リフィアは未だ顔が赤いが、ヴァンのことが気になるのか会話に
入ってきていた。

「やっぱり気になるんじゃない？ 自分から行動起こしていかな
いとダメだよ？」

「や。その……。でも、えっと……」

リフィアはただただオロオロしていた。

「ユリ。あんまり急かしちゃダメだって。そんなに焦らなくてもいいと思うよ?」

「だって。面白んだもん」

ヒナギクに窘められたユリが少し拗ねた風に言った。

「面白って……。あのねえ」

ユリの言葉を聞いたヒナギクは呆れ顔だった。

突入へ（前書き）

3カ月です。ホント、すみません。

突入へ

鉾山に突入する前に、各々が休憩を取った後。

「じゃあ、準備はいいかい？ そろそろ中に入るけど」

野営のための焚き火を消して、シヨウキが皆に向かって言う。

「ああ」

「大丈夫ですよ」

「バッチリ！」

「頑張りますっ！」

皆、様々な反応をシヨウキに返していた。

「よし。それじゃ、パルプロ鉾山のすぐ手前まで進もう。一応、無駄な戦闘は避けるよ」

「行方不明になった人が此処に居てくれると良いんですけど……」

「そうだね。それは入ってみないと分からないけど」

「お願い、見つかって……」

レイン達が前へ進みながらガル力達の身を案じていた。

「ヴァンさん、頑張らしましょうねっ」

「ああ。そうだな。って、リファイ？ いつの間に」

「え？ さつきから居ましたよ？」

「そうだったっけ……？ まあ、いいや」

ユリ達と一緒に居たはずのリファイがヴァンのすぐ隣へ移動して

いた。

「あの子、自覚が無いだけで、ホントはすごく積極的なんじゃないのかな……」

「あゝ。そうかも」

ユリがユウジの隣で呟いていた。

「これが……入り口か」

「そう。ここから先がパルブ口鉱山、だよ」

ヴァンが思わず見上げながら呟いた言葉にシヨウキが答えた。

大きな山にぽっかりと空いた穴が奥へと続いていた。入り口、と呼ばれている為か、木材で穴が固定されていた。穴はどこまで続いているのか、わからないほど先が真っ暗だった……。そして、入り口の横には昔、使われていたのか、運搬用の道具や皮袋が積み重ねられてあった。

「奥はどうなっているんでしょうか？」

リフィアがヴァンの横から尋ねていた。

「うゝん。僕もあんまり詳しくないんだけどね。昔は鉱山として機能していたから、ちゃんと整備もされているらしいよ。まあ、クダフ達がいることには違いないけど……」

「迷ったり、しないかな……？」

「地図は持っているけど、確実じゃないからね。安心は出来ないかな」

「そっかぁ……」

「ユリはすぐに迷子になるもんねー」

「なっ。そんなことないでしょ。ヒナっ」

ユリは顔を膨らませてヒナギクに反論していた。

「はいはい。そう思ってるのはユリだけだよ」

「もうっ！ ほら、入るよっ！」

ユリは納得いかないという風に顔を膨らませながら先へ進んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5872i/>

FF11 ~新たなる旅立ち そして~

2010年12月10日02時22分発行